
剣盗りモノガタリ

松下星哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣盗りモノガタリ

【Nコード】

N1121Y

【作者名】

松下星哉

【あらすじ】

とある国の一人の少年が様々な国を旅しながら妖魔やモンスター、剣の使い手等と闘い、色んな出会い、そして人として剣士として成長していく剣の物語。

バトル、ラブコメ要素ありな昔風の印象を与えつつ、実は未来の話

第1話〜序章〜（前書き）

とりあえず、不慣れなので見づらいかもしれませんがご容赦下さい。

第1話／序章

プロローグ

・・・その日、山向こうの夜空が煌めき、大気が震えた。
家の外では村人たちが何事かと、騒いでいた。今日は祭りで特に人出が多い。

「何だ、何だ今の音は」

「一瞬光ったぞ」

「何もこんな目出度い日に・・・」

俺、トウヤ・ヒノカは家の外から聞こえてくるそんな話し声を聞きながら、そつとため息を吐き、目の前の人物へ話しかけた。

「親父、外が何やら騒がしいが様子を見に行かなくていいのか？」

おれが自分の父親である目の前の人物、タチオ・ヒノカにそう言ったのには二つ理由がある。

一つは、俺の親父はこの村で村長に次ぎ二番目にお偉いさんだということ、もう一つは俺自身外に出たいということ。なのだが・・・
「心配は要らん。話し声を聞く限りでは、このあたりには被害もなさそうだし、余程大事になれば村長が出張ってくるだろう。それよりも今は儀式を終わらせるほうが先決だ。」

・・・これである。ちなみにこの儀式というのは、この村の古くからのしきたりで、15歳になると元服げんぷくを迎えた、つまり一人前の大人として認めるために、様々な儀式、説明等が行われる。

まあ、それに伴い色々な権利、例えば剣を持てるようになったり村

の外へ出れるようになったり、だとか。ようやく旅に出れるなあ・

「つまり、そのことを踏まえていれば、いざというときにも・・・トウヤツ！聞いているか!？」

「モ、モチロン」

聞いてませんでした。

「ふう。お前というやつは・・・まあ、いい。儀式は終わりだ。どうせお前のことだ、最後まで真面目に聞くとは思ってない。」

と親父殿は苦笑しながら、

「明日には旅立つんだろう？しばらく帰ってこんだろっから今日はせっかくの祭りだし楽しんでこい」

と話が分かることを言い出した。

「ああ、ありがとう親父。・・・父上。行ってきます。」

俺は立ち上がると、親父に一礼し、外へ飛び出した。

暦255年、7大陸から成る、とある国のとある村の一室より物語は始まる・・・話は12年程前に遡る。

～暦243年～

空は澄み小鳥のさえずりが聞こえる、そんな爽やかな朝だった。そ

の空の下にある屋敷の庭先で・・・

「えいつ！やあつ！とうつ！」

朝の静寂を打ち破るように一人の少年がそんな気合いとともに木剣を振り回していた。軽くよろけながら。

「トウヤ、剣は力任せに降ってもダメだぞ。それに剣に振り回されすぎてるな」

と、たしなめる声が少年の傍から聞こえた。

それは、黒髪を短髪に揃え身の丈180？へ僅かに届かない筋肉隆々な青年だったが、その少年を見守る黒い瞳の眼差しはとても温かなものだった。

「むう。でも、このけんがおもたくてむずかしいよ、とうちゃん」

と、トウヤと呼ばれたこれも黒髪黒瞳の少年は口を尖らせて抗議する。

「はは、そうだな。トウヤの身体より剣のほうが大きいもんな。ただ剣を振るうのは力任せじゃ駄目なんだ。ちよつと貸してみろ。」と、父ちゃんと呼ばれた青年タチオはトウヤと呼ばれた少年より剣を受けとる。そして、諭すような口調で、

「いいか、トウヤ。人には体内に流れるオーラってものがある。それを上手く操ることで力も速さも何倍にもすることができるとだ。」

と、タチオは木剣を受けとると同時に全身にオーラを纏いだした。淡く身体が光りだし、剣先まで光りだした。

「よく見ておけ。これがオーラだ。このように自分の身体から手に

持った武器にまでオーラを行き渡らせることで破壊力や反応速度が数倍から数十倍に跳ねあがる」

と、おもむろに目の前にある大岩へ剣を振りかぶる。

ドゴン！

そんな音がし目の前の大岩が真つ二つに割れる。

「このようにオーラを纏った武器で斬ると木剣といえどかなりの破壊力になる」
と説明する。

「まあ、いきなりやれといっても無理だろうから徐々に覚えていけばいいさ。まあ今日はここまでにしとこう。汗を拭いとけよ。」

そういつてタチオはトウヤの頭を軽く撫でて、家のほうへ踵を返した。

「おーら・・・？」

三歳の少年には言葉のみの説明が難しいと判断したのかは分からないが、実際みてもよく分からないといった風情の少年がそこに立ち尽くしていた。

第1話〜序章〜（後書き）

ご意見、ご感想あればよろしくお願い致します。

第2話　旅立ち（前書き）

大筋みたいなものを書いてないので内容がわかりづらいかもしれませんが。

また、文章の拙さはご容赦下さい。

第2話　旅立ち

暦255年

いざ、出発しようとして家の庭先で佇んでいたら、ふと修行を始めた頃の記憶が頭を掠めた。

「そういや、あの頃はまだ自分の本当の能力も知らなかったな」
軽く独りごちてみる。

「まあ、右も左もわからんようなガキだったからな。しょうがないか」

その時後ろのほう、つまり家の玄関から大きな声がした。

「トウヤー！元気でやれよー！魔物に気をつけてなー！」

親父も心配性だな

「分かってるってー、父さん！それじゃあ、行ってきまーす！」
俺も後ろを向き右手を挙げて大声で返す。

「さてと、行きますか」

こうして俺は生まれ育った村を出た。この先起こるであろう様々な出来事に胸を躍らせながら。

「村の外」

そして今、感覚的に村を出て30分ぐらいもした頃だろうか、俺は何と言うか困惑していた。
というのも、

「聞ってるの？トウヤ？まずはこっちの海沿いよりも山道を通ったほうが隣の村にずっと近いのよ？」

と、話しかける奴が居るからだ。

「いや、だからな、俺が聞きたいのは隣の村への近道じゃなくて、何故お前が村を出て此処に居るかということなんだが・・・ネク」
するとそいつは何故か微かに目をそらしながら、

「だ、だから私も母様からちゃんと許可を取って村を出てきたって言うてるじゃない！」

と軽くキレながら言ってきた。

たしかにこいつ（ネク・カナワ♀）の母ちゃん（アオイ・カナワ♀）の大方的な性格なら、例え女の独り旅でも、大して気にせず旅の許可をくれそうだが・・・ちなみにこのネクは、俺のお隣さん家の一人娘で、俺にとつて所謂幼なじみってやつだ。しかも誕生日が二月ばかり俺より早い。そのせいかやたらと年上ぶってきやがるのがアレだが・・・はぁ・・・そんなことよりも、

「いや、俺が言いたいのは何で俺が村を出た後にお前が後ろから追ってくるようなタイミングで現れたってことなんだが。お前ももう少し早く村を出ることができた筈だろう？」

と俺が言つと、こいつは言い訳がましく、

「い、いや私も自分の誕生日に村を出ようとしたのよ？ただ、色々と都合が合わなかったっていうか、気がのらなかったっていうか、・

・・独りじゃ不安だったっていうか・・な、なによ！こんな美少女と一緒に旅ができるっていうのに何が不満なわけ！？」と逆ギレしてきた。

不満っていうか、まあ確かにこいつの見てくれは身長155？程度で小柄だけど、腰まで伸ばした絹みたいなサラサラの黒髪に異常なぐらい白くて綺麗な肌、2年ぐらい前から急に大きくなりだした胸にも関わらずやたらと細い腰、猫みたいな大きな黒い瞳と整った形の鼻や口、と傍から見たら間違いなく美少女の部類には入るんだろうが、いや入るのか？

まあ、人口500人程度の村では同年代の子供は居らずいまいち基準がよく分かんが、そこは大して問題じゃない。

俺の自由気ままな独り旅計画が・・・

撒くか？いや、それでもしこいつが魔物や山賊とかに襲われたらさすがに寝覚めが悪いな。

はあ・・・

まあ、とりあえず隣の村までは一緒に行ってそれから考えてみるか。規模が俺の村よりも5倍はあるって話だしな。

「分かった、分かった。一緒に行こうぜ。とりあえず隣の村まで。口入屋で仕事も探す必要があるだろうし、宿屋も探す必要」

そこまで言って、異常な気配と聞いたことがない声が後ろから聞こえた。

振り替えるとそこには、顔が魚っぽく、体つきは人っぽい何かが立っていた。

第2話　旅立ち（後書き）

ご意見、ご感想、等あればよろしくお願い致します。

第3話〜遭遇〜（前書き）

いまいち行の間隔がつかめないので、読みづらいかもしれませんが
ご容赦ください。

第3話　遭遇

そいつは今まで見たこともないような姿をしていた。魚のような顔（といっても大きさは人の顔ぐらいあるが）、大人と同じぐらいの背丈（165～170？程度）、手足に生えた鱗と青っぽいというか、緑っぽいというか何とも表現し難いぬめつとした皮膚、明らかに人間ではなかった。

ネクが

「は、半魚人？」
と言う。

「半魚人？あれって魔物の部類に入るのか？確かに異形じゃあるが・
・・」

そもそも、今の世でいうところの魔物の定義とは、
『人語を解さず人間へ害意を持つ異形の生物』とされている。つまり、こちらの言葉が通じずしかもこちらへ攻撃してきたり食料にしてこようとする生物が魔物というわけだ。
だから、ものは試しだと俺はそいつに話しかけてみる

「あー、えっとその奴、俺達に何か用か？」
と、俺が言つとその半魚人？らしき生物は目を大きく見開いた。

「オマエ、俺を見て驚かないのかっ！？」
何か言葉が通じた。

「い、いや、確かに見た目は人間じゃないけど、別に襲いかかってくるわけでもないしな。それよりも今お前が喋ったことに驚いたが・
・・」

俺がそう言つと、半魚人は

「オレはこう見えてオレの一族では天才と呼ばれている。一族の中には、人語を喋れない奴も居るぞ？むしろ喋れない奴のほうが多いな」

流暢に返してきた

「そうか、天才の一言で片付けるのもどうかとおもうが・・別に俺達を食おうとしたり襲いかかってくるわけじゃないんだな」
俺がそうい言つとそいつは憤慨して、

「人間が人間以外の生物に対して偏見を持っていることは長の話や人間の書物などで知っているが、勝手に決め付けるな！そもそも俺達魚民は海藻や貝ぐらいしか食べない大人しい生物だ！」

「魚民っていうのか・・まあ、お前の言いたいことは分かった。じゃあ、改めて聞くが俺達に何の用だ。まさか、ただ話しかけたかっただけか？」

そう言つと魚民は、

「それもある。この道を人間が通ることは珍しいからな。」

と言つた。

するとネクが、

「そうか、ここはもう村の結界外になるのね。だから・・・漁師の人達は普段は村付近の結界内で働いてるからね。」

ちなみに結界とは、かつて250年以上前に歴が始まった当初、この『火の大陸』を制覇した時の王スサノオが各地域を統治しやすくするために、結界技能を持った者、当時妖術師と呼ばれた者をかき集めて、当時存在していた集落毎に施していったものである。その結界の範囲を基準に現在の各村が作られていった。正式な呼び名は人口100人以上の集落を村、人口1000人以上の集落を町、人口10000人以上の集落を街という。街規模になると、俺の村では見たこともないような珍しい物がある。何年か前に来た行商の持ってきた、あの甘い菓子・・・

「それで、本当に何の用なんだ？確かにもの珍しいとは思うが、この道に全然人が通らないというわけでもないだろう。なんでわざわざ俺達に？」

と俺が言つと魚民は、

「確かに、人間自体は何回か見たことはある。ただ俺の好奇心は並外れていてな、珍しい人間の番つかいが見れて思わず興奮して近づいてしまった。俺達魚民は成人して時期がくれば、卵を産み出して子孫を残すが、オマエら人間は雄と雌が交尾して子孫を残すのだろう？だから交尾が見れると思ってつい近づいたんだ」

といった。なるほど、つまりこの道は人が通ることもあるが俺達のように男と女が二人揃って通ったことはない。それが珍しくてつい近寄ったと。納得だな。

すると横の奴が

「な、な、な、何を言ってるのよあんたっ！？っ、っがいつ！？こ、こ、こ、こうびっ！？な、なんであたしとこいつが番でこ、こ、交尾しなくちゃいけないわけっ！？交尾するにしても、こ、こっちだって、段階とか準備とかそれなりに雰囲気とか必要なんだからねっ！？」

「うん、落ち着け。微妙に論点がずれてるぞ。あー、それと魚民？俺達は別に番でもなんでもないぞ。ただの知り合いの男と女っただけで、別にお前が期待することはなんにもないぞ。」

そう言うとき魚民は、

「そ、そうなのか。珍しいものが見れると思ったのだが・・・まあ、初めて人間と話せただけでもよしとしよう。」

と納得した感じだった。

「まあ、俺も珍しい奴と喋れてよかったよ。それと偏見は改めるわ。悪かったな。旅の途中だから、俺達はもう行くぞ。縁があったらまた会おうぜ。」

俺はそう言いつと手を振って魚民に別れを告げ、踵を返して歩き始めた。

「・・・ただの知り合い・・・そうよね、そんなものよね・・・」

横でネクが小声で何かボソツと言ったようだが、俺にはよく聞こえなかった。

第3話〜遭遇〜（後書き）

大まかな設定は纏まっているのですが、それを文章にするのが難しいです・・・

第4話〜魔物〜（前書き）

やたらと説明くさい話になりました・・・

第4話　魔物

俺の村は名前をカリユウ村といい、場所はこの火の大陸の最南端に位置する。

その名産品といえば、海に近いという地の利を活かして収穫の多い海産物が真っ先に挙げられる。

他の地域に行商に持つて行く主な商品としては、一番近い村でも、大人の足で歩いて片道に最低3日は掛かるためやはり日持ちのする魚貝類の干物等が多くなるのは、まあしょうがない。

隣村は海から遠いためそれらは毎回完売するらしい。

他には、農作物やら織物やらが主力商品とは言わないまでも、安定した供給を行えるので、隣村には固定客がついているらしい。

そんな感じで物についてはそれなりに他の地域と上手く取引をしていると村の行商人達は言っていた。

物以外でカリユウ村の有名なモノと言えば二つありその1つには剣術が挙げられる。

それは、ここ数年でじわじわと有名になってきたという話だがそれには理由がある。

この大陸の首都であるカグツチという街で年一回開催される格闘大会でのここ数年の優勝者が、カリユウ村出身のヒノカ流剣術の使い手だということだ。

まあ、知り合いの姉ちゃんだが。

何でも華奢な見た目とは裏腹に鬼神の如き動きで物凄く強いことから人目を引き出身地や流派が他の大会参加者や観客から注目されたらしい。

優勝後、街にある城への士官の話、旅の用心棒、町や村等の警備、ついでに縁談が相当数本人へ舞い込んだらしいが全て蹴って今は街

で悠々自適に暮らしているとその人のお母さんは言っていたが。まあ余談だが。

もう1つの有名なこととは現在より何百年も前から、

『世界の7大陸にはそれぞれの大陸に一本ずつ、神剣しんけんが刺さっておりそれが大地や生物を活性化させ、生活を豊かにしている。それを引き抜き手にした者は人であれ鳥であれ魚であれ神と等しき力を得るだろう』

という確信めいた、冗談のような、『7神剣物語』（ななしんけんものがたり）、という話が言い回しや言語が違うにしてもどの大陸にも似たような話が伝えられているらしく、その話を基に、火の大陸初代霸王であるスサノオが大陸統治後に火の大陸の神剣を追い求めたという話が残っている。

結局見つかったという話はなく（どの大陸でも）、近年に、とある探索方法が見つかるまでは、神剣探索についてはずいぶんと下火になっていたが、その新しい探索方法により、神剣らしき場所に大体的見当がついたということで、現在街では神剣探索隊が編成されているらしい。

その探索方法とは単純な話で、「神剣がある場所に近づくほど魔物が活性化するのではないか」

という説とある学者が以前に打ち出したらしく大陸中の測量と魔物の分布図を作成するため旅を10年程度し、最近漸く完成しそれを見当した結果、大陸の南側の方が明らかに魔物の質、量が高いということが判明したのだった。

だから、大陸の南側に神剣が刺さっている可能性が高いのではないかとこの説が広まっていき、最南端にあるカリユウ村に何かしら神剣と関係があるのでは？という話が広まっていき、カリユウ村が大陸で有名になったのはまあ、大会優勝者の話と合わせ、偶々そんな

時期が重なった、のだと思うことにしよう。

まあ、何故急にそんな事を思ったかといえば・・・

「トウヤ！なにボーっとしてんのよっ！右に回りこまれてるわよ！」

とネクが叫んでいた。

というのも昨日魚民と別れ海沿いの道を進んだあと、山道に入った俺達は今、魔狼の群れに囲まれていた。魔狼とは、見た目は狼のような、だが狼の体長を倍ぐらいにした（ざっと見て3mぐらいか）、全身真っ黒な毛に覆われた、自分達以外の生物は餌ぐらいにしか考えていない魔物の呼び名であり、並の人間が戦えば大人2人であろうやく一頭と渡り合えるといった程度の強さの生物である。そんなやつが俺達を取り囲んでいた・・・10頭ぐらい。

いや、待て。数がおかしくないか。聞いた話では確かにこの生物の習性は数頭群れて獲物を襲うということだが、明らかに多いよな。いくらこのへんが大陸の南とはいえ活性化しすぎじゃないか。そう思いつつ俺は右側に近づいてきた魔狼へ対して腰から抜いた剣を横に薙ぎ払い魔狼を胴から真っ二つきした。

「ギャウンッ！！」

そんな鳴き声と共にその魔狼は倒れた。

「グルルルッ」

「ウーッ」

「ガオン！ガオン！」

その様子を見た他のやつが俺達を遠巻きにしながら吠えてきた。今にも飛びかかってきそうな体勢で。

「さすがにあれだけの数に同時に襲いかかれたら不味いな」
俺がそう言つとネクが、

「あんた何言つてんの！？あんたが有無を言わず切り捨てるから手持ちの食糧を蒔いてその隙に逃げようとしたあたしの作戦が台無しじゃない！」
と言つてきた。

「いや、そうは言っけどな？それは一頭二頭ぐらいなら何とか通じる作戦だろ？さすがにあの数には足りないと思うんだが・・・」
するとネクは

「じゃあ、どうするの！？行商の人が持つてる魔物避けもないし、逃げ切れそうにもないし、どうしようもないじゃない！？」
と焦った様子である。

「まあ、落ち着け。俺の強さは知ってるだろ？あの程度の数どうつてことないさ。」

俺が言つとネクは、

「ま、まあトウヤが強いのは知ってるけど。あたしが言いたいののは剣でどうにかなる数？ってこと」

と言ってくる。

そこで俺は漸く合点した。こいつへは同じ剣術道場での剣技ぐらいしか見せたことがなかったっけ。

「違う。俺の本当の実力を見せてやるよ。・・・下がってる」

俺はそう言つと愛剣の炎斬^{えんざん}へと意識を集中させ始めた。すると・・・
「えっ？なにこれ、剣が光り始めた？」
ネクが言う。

「ああ、これが所謂オーラってやつだ。このオーラを利用することによって、剣と俺の体は何倍にも強化することができる。ただ昔見たけどニルナ姉もオーラを使ってたぞ？知らなかったか？」

そう言つと俺はオーラを纏つた炎斬をネクへ見せる。ちなみにニルナとは三歳上のネクの姉貴で、実は大会優勝者その人である。

「ニルが？確かに昔から強かつたけど・・・」

と若干腑に落ちない顔をする。

「まあ、いいや。さて行くぞ、魔狼どもっ！」

そう言いながら俺は魔狼の群れに飛び込み斬りかかった。

ズバッ！ザシュッ！バキッ！

「グオーッ！」

「ギャン！ギャン！」

「クウーン・・・」

そんな鳴き声とともに魔狼は全頭地面に倒れ伏した。

「まあ、こんなもんだ。強いだろ？俺？」

俺がそう言つとネクは、微妙に納得してなさそうな顔で、

「オーラって何かズルい・・・」
と結構心外なことを言っていた。いや、別にズルくはないだろ・・・
俺は軽く嘆息し旅を再開した。

第4話〜魔物〜（後書き）

不快感がなければそれでいいです。ご意見ご感想あればお願いします。

第5話〜温泉街〜（前書き）

イメージ通り、には進まないものです・・・

第5話　温泉街

魔狼の群れと遭遇後、もう二日ばかりかけて夕刻頃、漸く一番近い隣の町へとたどり着いた。

その町の入口にある門を見上げて、

「大きいな・・・」

俺がそう感嘆の声を洩らすと、

「大きいね・・・」

と、横のネクが似たようなことを言った。

「いや、カリユウ村にも似たような形の門はあったけど、大きさが違い過ぎるだろ？」

そう、カリユウ村の入口にも門があるが精々3mぐらいの高さしかなかったが、この村の門はどう見ても10mはありそうだった。

「いやー、流石に村の規模が違っただけあるね。あそこが守衛所かな？」

そう言っってネクが向かって右にある小さい建物を指す。

「だろうな。えーっと、知らない村に入るには、身分証明書が要るんだよな。どこに仕舞ったっけ。」

俺は手持ちの頭陀袋に手突っ込み身分証明書を探す

「あつた。よし行くぞ。」と言って、入町の手続きをするため守衛所らしき建物に向かった。

くイグナ町く

町へ入る手続きを終えた俺達は、町中に入り目的の場所を探した。我儘を言う横のやつのために。

「もーっ！宿屋は何処なの？イグナ名物の温泉宿屋はっ！！」

「おい、落ち着けよ。守衛所の人も言ってる？温泉街は町の外れにあるって。そう直ぐには着かねえよ。」
「としようがなしに俺は宿める。」

ここイグナは源泉が湧き出るとかで温泉が名物の地域である。湧き出る量も豊富なため、それを利用して何軒も温泉用の宿屋があるらしい。

それ目当てにこの町へやってくる人も多いらしく、宿屋も必然的に増えていき、それに伴い色んな商売、例えば料理屋、名産品店、飲み屋、賭博場、等々の建物も増えていったという話だ。まあ、町の外から来た人は、温泉に入った後は羽根を伸ばしたい気分になるのだろう。

また、地元の人も家でわざわざ薪や火を使って風呂を沸かすよりは経済的なのか、温泉には常に人が多いとのことだ。

「おっ！それっぽいところに来たんじゃないか？」

それから一時間弱も歩いたところで、雰囲気の変わった場所に出た。妙に熱気があるな。

「キタキタキターーッ」ネクがアホみたいに騒ぎだし、駆け出そうとした。

「待てっ！止まれっ！さっき聞いたお薦めの温泉宿屋を探すぞ！飯が安くて量が多く美味しい、チヒロ屋って宿屋を！」

俺は慌てて声をかける。

これだけは外せるか。

「ええー。ご飯はどっちでもいいよ。それよりも湯船が広くて、美容に効く温泉がある宿屋を探すほうが……うん、チヒロ屋を探そう！」

何故か俺のほうを見ながら焦ったネクがそう言い出した。

いや、別に腹が減って機嫌が悪いとかじゃないぞ。

本当は温泉はどっちでもよくて飯のためにここまで付き合ったのに、ふざけたことを言い出したネクを物凄い目付きで睨んだとかそんなことはないぞ。

「ああ、美味そうな匂いからして、多分あの正面にある大きめの建物だと思う。さっさと行こうぜ。」

上機嫌になった俺はネクを促し、早足で先に行く。

「そ、そうね。早く行きましょう。」

（危ない、危ない。そういえばこいつはご飯の邪魔をすると物凄く機嫌が悪くなるんだった・・・それにしても匂いって・・・）
ネクはそう思った。

その時、右の料理屋らしき建物の扉が開き女の子が飛び出して来た。
「助けて！」

そう言いながら私の後ろに隠れた。
年の頃は私と同じか少し下ぐらいで、着物の上に白い前掛けをしていた。

続いてその扉から屈強そうな顔を赤くした男達が出てきた。3人ほど。

「おいおい姉ちゃんよ、逃げることねえだろ？ちよっとお酌してくれって言っただけじゃねえか」

真ん中の大柄な男が笑いながらそう言った。左右の二人も何が嬉しいのか笑っている。

「嘘です！無理矢理座らせて手とか、お、お尻とか触ってきました！」

その女の子が涙目になりながら私に訴えてきた。

「あれー？酒代にお姉ちゃんへのお触り代も含まれてるんじゃないの？」

右側の太った小柄な男が
嬉しそうに言う。

左側の痩せてひよろつとした男が、

「まあ、いいじゃねえか姉ちゃん。戻ってこいよ。呑もうぜ？」
と笑いながら言う。

「う、うちはお料理屋でそういったことは一切してません！」
と女の子が必死になって言う。

「うるせえっ！こっちは代金払ってんだ！さっさと戻って相手しやがれっ！」

と真ん中の男が怒鳴りだした。

私は煩わしいと思いながら「あのー、この子も困ってるみたいなんです、あんまり無茶なことを言わないほうがいいんじゃないでしょうか？」

と遠慮がちに言ってみる。

すると、男達が顔を見合わせて笑いながらこちらへ、「お姉ちゃん別嬪だな。いいぜ、店を出るから俺達に付き合えよ？宿屋で一緒に呑もうぜ。」

と真ん中の男が私に言ってきた。宿屋？

「それは嫌です。あなたたちの相手をしている暇はありません。大人しく中で呑めないなら勝手に宿屋でもどこへでも行って下さい」

というと、何が嬉しいのか、

「おー、気の強い姉ちゃんだこと。まあ、いいから、いいから。」

と言つて、酒臭い息を撒き散らしながら私の腕を掴んできた。その時、

「おい、ネク！何やってんだ！早く行くぞ？」

結構先まで歩いていたらトウヤがこちらへ走つて戻つてきて怪訝そうにした。

「誰だ？こいつら？」

トウヤが言うので、私は

「酔っぱらい」

簡潔に答えた。

「ふーん。おっさん、こいつは俺の連れなんでその手を離してもらえるか？」

と言つと、

「あーん？なんだてめえは？この姉ちゃんは俺達と一緒に呑むんだよ。すつこんでろ！」

と凄んでいた。だがトウヤは、

「いや、おっさん、聞こえなかったか？俺は手を離せつて言つたんだが。それにそいつは今から俺と飯を食うんだよ。邪魔すんな！」
キレ気味に言つた。

「こ、このガキイ！おいっ！このガキやつちまえ！」と後ろの二人

に言う。

「おいおい兄ちゃんよ。お前こそ人の楽しみを邪魔するとはどういふつもりだ？ああん？」

「そうだぞ。そんな野暮なやつはこうだっ！」

とひよろつとした男がトウヤに殴りかかったが、トウヤはその腕をかわし、右拳を男の顔面に叩き込むと、もう一人の小柄な太ったほうのお腹を右足で蹴りとばした。

二人の男は悶絶した。一人は口から何か吐いていた。「ぐうう」
「ぼえええっ！」

一連の動作はほぼ一瞬である。

そこに居る女の子と大柄な男はポカーンと呆けていた。

「て、てめえクソガキ！なにしゃがる！」

と私の腕を離すと、大柄な男はトウヤへ向きあった。

「いや、なにっ？殴りかかってきたんで、殴って蹴っただけだが？」

トウヤがキレ気味に言う。男は青ざめた顔で、

「て、てめえツラ覺えたからな！覺えてるよ！」

と言いながら後ずさり、二人の男を引き摺るように逃げて行った。

するとトウヤが呆れたように、

「なんだ、あれ・・・まあいいや。ネク！早く行くぞ！もう腹が減って腹が減って・・・」

と、踵を返して歩きだす。

「わかったわよ。さあ行きましょ。」

と私が言つと、

「待つて下さい！」

そんな声がかかった。

女の子は、

「あ、あの、ありがとうございます！おかげでたすかりました。」
と律儀に礼を言ってきた。

「いいの、いいの。偶々通りかかったただだから、気にしないで？」
と私が言つと、女の子は

「いいえ！そういう訳にはいきません！お礼をさせて下さい！あの
ー、もし良かったらご飯を食べて行かれませんか？もちろん代金は
結構です」

女の子が私にそう言つと、それが聞こえたのかトウヤが振り返つた。
目を輝かせながら。

これは絶対食いついてるわよね・・・温泉でお肌ツルツル計画が・・・

・

まあ色々な話が聞けるか、と思い直し

「わかった、有り難くご馳走になるわ」

と、女の子へ笑いかけながら言つた。

第5話〜温泉街〜（後書き）

ご意見ご感想などあれば、お願いします。

第6話〜仕事〜（前書き）

内容をぶっちゃけると説明の回です。

第6話　仕事

目の前にどんどんお皿が積まれていく。

確かにうちの店の料理は地元の人にも観光客にも評判が良く、イグナ温泉街一の料理屋と言われることもある。でも、いくらなんでもこの量は……

そんなことを思いながら、給仕の女の子はボーっと目の前の状況を見ていた。

目の前には、

「うん！これは美味しいな、イグナ地鶏だっけ？肉の歯応えも最高だし、甘辛い味付けも肉に合っててやたらと箸がすすむな！」

と、箸を休めることなく料理を片付けていく少年が居た。

「あ、あんた！少しは遠慮つてものをしなさいよ！もう何皿目なの、イグナ地鶏の丸焼き？ひー、ふー、みー、……もう10皿いってんじゃない！」

と連れの少女が叫んでいた。

「えー？もうそんなに食ったか？美味すぎてついついおかわりしちまったよ。まあ、腹八分が健康にいいって話だし、このへんにしとくか！ごちそうさん！ありがとう、マーマー！」

と私、給仕の女の子ことマーマー・ナカヤに少年がお礼を言ってきた。

「い、いえ喜んでもらえて私も嬉しいです。それにしてもトウヤさ

ん、よく食べられるんですね？」

ちなみに私はイグナ地鶏の丸焼きは、一皿の三分の一ぐらいでお腹がはち切れそうになるのだが・・・

「そうか？何ならちよつと食い足りないぐらいだぞ？まあ、それだけ料理が美味かったってことだろ」

と、恐ろしいことを言った

「ま、まあこいつの食べ物にの量に関してはいつものことだから気にしないで？」

と、連れの少女ネクさんが言った。

さらに、

「何かごめんなさいね。大したこともしてないのにこんなにご馳走になって・・・」

と謝られた。

私は焦って、

「いえいえ、とんでもない！本当に助かりました。お礼ができて嬉しいです！あと、色々お話ができて楽しかったです！」

そう、お二人の出身地のカリユウ村の話や、女の子同士の話ができて、私はとても楽しかったのだ。年も私より一つだけ上なため、話も合ったし。

すると、厨房のほうから、「そうだぞ、姉ちゃん！

あいつらは、イグナでも有名な質の悪いゴロツキどもだ。丁度俺が出かけてた隙に店に来て、マーミにちよつかい出してやがったんだ！俺が居る時は全然そんなことしねえのによ！」

と、この店の店主兼料理人兼私の父親、ガシユウ・ナカヤは言った。

（店主は見た目がいかついから、それを怖がっていつもはマーミに悪戯ができないんじゃないか）
俺は密かにそう思った。

（まあ、俺達も飯をご馳走になったから、結果的には良かった、と思うことにしよう）

俺達は食事のお礼をいって料理屋を後にした。

翌日、俺達は町の中心地である場所を探していた。

（昨日は結局、温泉宿屋には行かなかった。だって飯をご馳走になったしなあ。俺の目的の九割は飯、残り一割が温泉だ。そのことについて連れは何か言いたそうだったが、めんどくさいので無視した。）

それで、今探している場所というのは口入屋^{くちいれや}だ。

口入屋というのは、平たく言えば職業斡旋所^{あっせん}で、日雇いの仕事から短期、中長期の仕事を紹介してもらう場所だ。

また、自分で仕事の依頼、人足^{にんそく}の紹介を頼むこともできる。まあ、依頼料に加えて、口入屋への口利き料も必要なので、とりあえず今は関係ないが。えーっと、今の手持ちはと・・・795丸^{がん}か。

もう、何日かは宿屋に泊まれるが、あんまり余裕はないな。

ちなみに、丸はこの大陸唯一の共通貨幣で、大陸の初代霸王スサノオが、大陸を探索中に見つけた、数百年程度経った朽ちかけた遺跡から、恐らく貨幣ではないかという数種類の丸い貨幣らしき物を基に作成されたとされている。

作成場所は、これもまた鑄造所らしき遺跡を手本として建てた首都の貨幣鑄造所しかなく、一目見て分かる見た目の緻密さと材質の稀少さからそこ以外では作るのは可能とされているため偽物は作れないはずだ。

材質は一番小さい物から、1丸、5丸、10丸、（銅製）

50丸、100丸、500丸（鉄製）1000丸、5000丸、（銀製）

10000丸（金製）

そして形は呼んで字の如く丸く、大きさは数値が大きくなるたびに一回りずつ大きくなっていく。

1丸は親指の先程度の直径だが、10000丸は手のひらぐらいの直径であり、しかも金製なので重い。

物価は、この町で料理屋での定食が一食50〜60丸、宿屋に一泊すれば200〜300丸といったところだ。

旅立つときに親父から1000丸ほど饒別にもらったが、このままでは宿屋に泊まれなくなってしまうので、こうして豊かな生活のために口入屋を探しているわけだが。

「ああ、あった。あれでしょ、この町の口入屋。やっぱりカリユウのより大きいね。」

とネクが左前方の建物を指していたので見ると

「ああ、あれだな。よし、入ってみよう」

俺は言いその建物に入った。

「いらつしゃいませっ！」

口入屋に入ると、正面の受付らしき木の机に座った20代ぐらいの目もとのパツチリした髪の短い綺麗なお姉さんが笑顔で元気よく言った。

俺は、愛想よく笑いながら

「元気いいね、お姉さん？あんまりきつなくて稼げる割りのいい仕事を探してるんだけど、何かいいのある？」

と常連っぽく言ってみた。するとお姉さんは怪訝そうに、

「えっと？お客さまは以前こちらをご利用されたことがありますか？」

と言うので、

「ないですっ！」

とこちらも元気よく言ってみた。するとお姉さんは若干顔を曇らせながら、

「あ、あのー。それなら初期登録を先にお願ひします。

それと大変申し訳ないのですが、初期登録の方の場合は丙^{へい}の下^げからの仕事しか受注ができませんのですが・・・」

と本当に申し訳なさそうに言ってきた。するとネクが

「ごめんなさいお姉さん！このバカの言い方が悪くて。確かにこちらにお世話になったことはないんですが、別の村の口入屋で登録して何回か仕事をしてきてますんで初期登録は必要ないです。」

と横から言ってきた。
バカっってお前・・・

「あ、あーそうなんですか。妙に慣れた感じがしたのはそのせいなんですネ。では、登録証を見せて頂いてよろしいでしょうか。」

お姉さんが言うので俺とネクは其々の登録証をお姉さんに見せる。

「ほうほう、お二人はカリユウ村のご出身なのですね。お名前はトウヤ・ヒノカ様とネク・カナワ様。

えっ！トウヤ様は等級が乙の中なんですか！？ネク様も乙の下！。

ほうほう、登録証を見る限りお二人は今までにかなりの仕事をこなされてますね？」

何か軽く驚かれていた。

まあ、三年ぐらい前に登録して、色んな仕事をこなして来たからな、それなりの等級にもなるってものだ。

ちなみに等級とは、下から丙^{へい}の下、丙^{ちゆう}の中、丙^{ちゆう}の上乙^いの下、乙^いの中、乙^いの下、甲^{こう}の中、甲^{こう}の上、甲^{こう}の特上

と、十段階に区分されており当然上の等級になるほど難易度が上がってくる。等級を一つ上げるにはその等級の依頼を最低3つは成功させ、なおかつ口入屋の責任者の許可が要る。まあ、魔物退治とか最低限の強さは必要なので、そのへんを見極めるために不可欠な仕組みだと思う。ネクが俺より等級が一段階低いのは倒せる実力があるのに見た目が可愛らしいという理由で兎（毛皮を採るため）を仕留めそこなったり、変な失敗を何回かしたせいだ。

大まかな仕事の内容といえば、丙の下などは草むしりとか家の掃除

とかで、大したことはないが、乙の下とかになると、魔物退治や獣を何頭か狩る、などと難易度がはね上がってくる。

俺は手っ取り早く稼ぎたいので

「ええ、まあ。数は多くこなしてきたんで、少々きついのも期間が長いのも大丈夫ですよ？」

と丁寧に言ってみる。

ちまちまやって報酬が安いのは嫌だしな。

横を見ると俺の言葉に賛同したのかネクもうんうんと頷いている。

お姉さんは少し思案して、

「うーん。そうですね。仕事に慣れてらっしゃるようですし、こちらなんかは如何でしょうか？お二人の希望に沿うことができるかと思われませんが。」

と、受付机から一枚の紙を取り出した。

その紙には、

『鬼族きぞくの村、探索隊募集！
集え強者つわもの！

未知の種族を調べてみよう！

参加資格：乙の下以上の等級者十名程度

参加期間：最短1ヶ月

報酬：お一人最低3000丸、但し成功報酬等は別途ご相談。

依頼人：アズト・ミトラ』

と書かれていた。

第7話　異変　（前書き）

別の人物視点にしてみました。

第7話　異変

「首都カグツチ」

当代の第16代スサノオ王の居城の一角のとある部屋では一人の男が手元の書類を見ながら馬鹿でかい声で怒鳴っていた。

「これはどういうことだ！何故警備兵の被害報告がこんなに多いのだっ！」

警備の者は何をやっておる！他に被害は！」

この方はシバ・ウチカネと言い、『宰相』（さいしやう）という王を武力・経済共に補佐する立場にある、王に次いで地位の高い者である。

年の頃は65ぐらいで、白髪で細く小柄な体格ながらも昔取った杵柄というか、武力官僚出身という経験に由来するのか、よく日に焼けたその皺の多い顔は陰しくその怒鳴り声は時に王ですら怯ませることがあるというほどの厳しい御仁だ。

私も今より小さい頃はよく叱られたものだ。主に悪戯で・・・その凄まじいまでの大声で怒鳴られながら、

「はっ！事に当たった警備部隊長からの報告によりますと1隊と2隊の警備部隊を総動員して、魔狼の群れを何とか倒し、街の結界内への侵入は防いだとのことですよ！」

と顔以外を全て保護できる鎧を身に付けた男が答えていた。

こちらの男は名をガロウ・サイハと言い、年は23、高い背丈に引き締まった体格、黒い長髪を真ん中から無造作に分けた髪型、その下にある整った凛々しい顔立ちから、城内の給仕の女の子、首都内の女の子から大変な人気がある。

また、この若さで首都の警備部総隊長を務めるほどの武力の腕を持つていることもその人気に拍車をかけているのだろう。私はあんまり好きじゃないが。

その人気者がそう答えるとシバが、

「戯けっ！！街中への被害が出ないようにするのは警備隊として当然じゃっ！

儂が言いたいのは、何故ただか魔狼の群れ15頭程度に2部隊48人のうち怪我人が10人も出たかと言うことじゃっ！ましてやその内の重傷者が2名じゃとっ！

最近の警備兵は烏合の衆かっ！！！」

と、さらに怒鳴りつけていた。

すると、ガロウが若干気まずそうに、

「それに関しては面目次第もございません。

今後は今まで以上に訓練に励むように全部隊へ通達致しますっ！」

と答えた。

すると、シバは

「ふんっ！まったくっ！儂の若い頃の警備部は……………」

と長々と説教し始めた。ガロウも可哀想に。

だが、と私は考える。

確かに魔狼はそれなりに手強い。手強いが警備部とは日頃から対魔物用の鍛練をしており、魔狼程度なら並みの警備兵1人でも2、3頭程度なら倒せる実力があるはずだ。それこそ1部隊24人なら魔狼15頭に対して余るぐらいの戦力だ。にも関わらず第1部隊のみならず第2部隊まで投入して、さらに怪我人まで出るとはどうも納得がいかない。

シバとて、そのへんの警備兵の実力などは把握しているはずなのに、頭に血が昇っているのか、その事には触れずに結果だけを見て説教している。どうもおかしい。そう思った私は説教がうざいということもあり、声をかけてみる。

「シバツ！説教はもうそのへんでいいんじゃない？

そんな昔話よりも今の問題は魔物が街近くまで侵入してくる現状をどうにかすることだと思うんだけど。警備兵の訓練にしたっていきなり強くなるものでもないしね。」

するとシバは

「確かにそうかもしれないがのう、姫。じゃが最近魔物に襲われることなく、弛んどった警備兵にも責任はあるじゃろう？なにより今の若いモンは実践経験が少なすぎる。

儂らの若い頃は今よりも危険な任務ばかりじゃったぞ。」

姫と呼ばれた私は、

「でもねえ。私もお父様と何回か警備兵の訓練見たことがあるけど、お父様も別に訓練内容に文句なさそうだったわよ。ねえ、ガロウ？」

と横のガロウに話を振ってみる。

ちなみに私の名前はシエル・スサノオ、年は15のうら若き乙女だ。父は現国王の第16代スサノオで、一人っ子の私は第一王位継承者となる。

（まあ、婿を迎えればそいつが王になるのだが、私より弱いやつと結婚する気はさらさらない。

自分で言うのもなんだが私の容姿はそれほど悪くはない・・・と思う。

今は亡きお母様譲りの栗色の髪を短くまとめた髪型にそれなりに整っている・・・と思う顔、贅肉のない引き締まった体、あまり大きくない胸・・・

だから高官の息子とか親族が私を見て怯えるのは見た目の問題じゃなく小さい時から剣術の実験台でボコボコにしてきた結果だ・・・と思う・・・）

なので、今年元服を迎えた私は政務を覚えるために、宰相であるシバに付き合っ、ここ執務室でガロウの報告を聞いていた。

「はっ！ありがとうございます姫！しかしシバ殿の言われる通り警備兵達にも弛んだ部分もあるかと思えますので、訓練は増やそうと思えますっ！」

と言うので私は、

「うん、それはそれでいいんじゃない？」

それよりも私が言いたいのは何故精鋭の警備隊が魔狼相手にそこまです傷を負ったってことなただけ。

シバ？報告書にそのへんの所見はある？」

するとシバは、

「まあ、実は僕も最初そう思った。いくらなんでもそこまで苦戦するとはのう。だが報告書には魔狼の数、出撃人数、襲撃してきた日ぐらいしか書いてないのう。何か追記はあるか、ガロウ？」

と言い、ガロウは

「はっ！自分は事後報告しか受けていないので実際にその魔狼を見てなく、各部隊長の言い訳かとも思うのですが・・・」

と歯切れ悪くなったので、私は

「いいから、どういう風に言われたの？」

と促すと、

「はい、報告の際に、第1第2部隊長が口を揃えて、「今まで戦ってきた魔狼よりも数倍強かったです！」と言っておりまして。

日付は報告書に書いてある通り4日前です。まあ、今まで魔物の襲撃を経験したことなく不意をつけたところもあるでしょうが・・・」

と言った。私は、

「ふーん。数倍強いねえ。言い訳にしてもおかしいわね。でも、あの真面目な2人がそう言うなら、冗談とか言い訳でもなさそうだから、それこそ実際に強かったんでしょ？」

と言った。するとシバは別の報告書を見ながら、

「ふむ、偶々魔物が襲撃したのも4日前か・・・直接は関係ないとは思うが、4日前に大陸の南のほうで何か大きく光ったという報告も入っておるな・・・こちらは何が起こったか見当もつかんのう。」

と何かブツブツ言っていた

「シバ？光ったって何が？どこが光ったの？」

気になったので聞いてみると、シバは

「まあ、魔物の襲撃云々とは別の報告なんじゃが、大陸の南、イグナ町に治安の管理者として置いておる者からの報告でな、4日前の夜にある場所・・・これは島じゃな、島から大きな光が見られたという報告じゃ。ふーむ。」

と言うので、その話が気になった私は、

「とある島？どこなの、その場所は？」

と聞いてみるとシバは、

「ああ、結界外の場合じゃな。イグナの町から数10？離れた場所にあって直接近くで見たわけではないが、その方角にはその島ぐらいしかないのでおそらくその島に間違いないじやろうという報告じゃ」

と言うが私は場所にいまいち見当がつかないので、

「ふーん？結界外なら人は住んでないんでしょ？何なのかしら、そ

の光？」

と疑問に思っ言つと

「ああ、人は住んでおらんじやろ。ただ大陸平定当初にスサノオ王が結界を張れなかったというその場所には、ある者達が住んでおるという話じゃよ。

儂も見たわけではないから詳しいことは言えんがのう。」

と言つので、私は

「結界が張れなかった？

ある者たち？どういうこと？」

と言つとシバは、

「ああ、結界はある強大な力を持った者たちに阻まれて張れなかったと、文献で見ただけじゃ。

255年前、当時大きな力をもった妖術師と呼ばれた者たちの力を持ってしても、それは叶わなかったらしい。

その時島に居たのが人語を解し、人の形に近い人在らざる異形の者、あじん亜人だったという話じゃ」

と言つので私は、

「えっ！？それってもしかしてお伽噺とかに出てくる鬼とか、妖精とか、あの？」

と言つとシバは、

「そうじゃ。まあ、若干種別が違う気もするが・・・ともあれ、魔

物と違いそれら亜人^{あじん}などは滅多にお目にかかれんが当時の書かれた文献には絵入りで書かれておったよ」
とシバが言うので、私は興奮し、目を輝かせながら

「へえーっ！！亜人って実在したんだっ！！
すごいねー！！」

そこにはどんな亜人が住んでるの！？」

と言うと、シバはこう言った。

「その島のことは、こう書かれておったよ」

『鬼族^{きぞく}の住まう島鬼ヶ島^{おにがしま}』
と。

第8話　島々（前書き）

話があんまり進まないですが・・・

第8話　島

「いやー、予定人数には少し足りませんでした、それでもこれだけの方々に参加いただけたとは思いませんでしたよ！」

「ハハハ！つと走行中の蒸気と帆を動力にした船の先頭に座っている男が上機嫌にそう言った。

名前をアスト・ミタラと言い、一昨日口入屋に言ったときに面白そうな仕事の依頼をしていた男だ。20代後半ぐらいで意外と若い。聞いた所によると商人兼探索屋で様々な場所取引しつつ、未知の場所や財宝などを探しているらしい。

あのあと口入屋で受付のお姉さんに他の依頼書をいくつか見せてもらった俺たちは軽く相談し、最初に見せてもらったアストの依頼を受けることにした（一つ依頼を受けると依頼を完遂するまで重複は不可なため相談した。）

資格も依頼条件に合ってたし、中々稼げそうだし、なにより鬼族きでくについていう言葉にとっても興味が沸いたからだ。

どんな姿をしてるか、とかどれだけ強いのか、とか。まあ、そもそも旅の目的が色んなものをみたり、強くなったりすることなんでそこは仕方がないと思う。

それにしても当初の予定より数が少ないらしいが、これで大丈夫か？とも思う。募集は10人程度とは書いていたのに俺とネクとアストを入れても9人しか居ないぞ？予定人数に足りなくていいのか？まあ、依頼内容は調査ということらしいが。それとも、人数が揃うまで待つてられない何らかの事情があるのか？

と、アストの言葉を聞いて参加者の中で一番年嵩の男が口を開いた。

「ふん、お主のその口ぶりだとよほど参加者の応募が少なかったとみえる。

報酬の嘉多は兎も角、内容はそれほど尻込みするほどのものではないと思っただけな？」

と他の参加者を見回しながらいう。

最初の自己紹介のときもおっさんは文句を言っただけ。この程度の依頼内容で人が集まるのが遅いだけのなんだから。

たしかこのおっさんの名前は、レンジ・ミタノ、等級は甲の下だったか、見た目は色んな戦いを経験してきたみたいないな傷がいくつもある顔に髭を無造作に伸ばした坊主頭、うちの親父ぐらい大柄な筋肉質の身体を鋼の大鎧に包んだ大体40歳前後ぐらいか。得物はそばに置いてある槍だろう。

と、おっさんの連れらしき男が慌てたように言った。

「い、いや、そうは言いますけどねレンジさん。僕たちみたいに依頼が始まってすぐに偶々口入屋さんに言っただけは少ないんじゃないでしょうか。」

それにレンジさんだって丁度運よく中期の仕事が見つかったって喜んでたじゃないですか？」

この男はおそらくレンジという男と今までに何回か一緒に仕事をしていたことがあるのだろう。気安い感じで喋りかけている。

こちらの男は名前をリクオ・シクラと言い、レンジよりも5〜6歳は年下に見える。見た目は短めの黒髪に浅黒い顔、多少小柄で引き締まった俊敏そうな身体に動きやすそうな革の鎧を見つけている。確か俺と同じ乙の中の等級でこちらは得物が左右の腰に差した二刀か。

アズトが、

「いや、私も募集期間は長いかとは思ってたんですよ。ただ、以前別口で似たような依頼をした時に募集期間を短くしすぎて人が集まらなかったたので。

まあ、今回は募集期間をあまり長くしすぎても機を失なったら元も子もないので、早めに募集を打ち切りましたが……」
と尻すばみに答える。

すると

「まあ、良かったんじゃないの？ 予定人数はほぼ集まったんでしょ？ この子達は見た目以上に役にたちますよ？」

それにこれだけ屈強そうな殿方たちが居るんだから充分だと思えますよ。」

と同じ顔をした2人の少女に挟まれた妙に色っぽいお姉さんが言った。

このお姉さん名前はリシナ・トゴウと言い、年は20代半ばぐらいで、見た目は肌の白いやたらと整った小さな顔に、色素が薄いのか茶色いさらさらの髪を肩まで伸ばしすらりと高く細い身体にでかい胸と尻を包む上が白く下が黒い羽織袴のような服で雰囲気がかく色っぽい。

等級は乙の上で得物はまあ見たまんま弓だろうな、あと手元の分厚い本も何なのか気になるが……

お姉さんの言葉を聞いた、傍らの右側の負けん気の強そうなほうの少女が

「そうよ！私たちが居るんだから何も心配なくていいよ、ね！師匠！

おじさんもそんなにくよくよしないで大丈夫だよ！私たちが居るんだから！」

と、朗らかに答える。

二回言わなくても・・・

ちなみにこの少女は名前をアリナ・クロカゲと言う。ネクと妙に気が合って話してみたいなんて年を聞いたら俺達の一つ下らしい。見た目は黒髪をおかっぱにし程よく日に焼けた目元のパツチリした美少女と呼べる顔、ネクより僅かに低い背丈に細い身体にリシナさんと同じような羽織袴を着ている。身体の凹凸はリシナさんに比べると少ないもののそれなりに出るところが出ている。等級はネクと同じ乙の下で得物はリシナさんと同じ弓か。

「わたしはまだギリギリ20代なのですが・・・おじさん・・・はあ、頼りにさせていただきますよ、クロカゲさま。」

アズトが軽く落ち込んだように言う。

すると、リシナさんの傍らのもう一人の少女が

「・・・うん・・・がんばる・・・」

とボソつと言った。

こちらはアリナの双子の妹でユリナ・クロカゲという。見た目はアリナとほぼ一緒に等級も一緒だが見た感じ性格はアリナと比べて大人しそうだ。得物は・・・ないな。いや、腰に差した短刀か？それとリシナさんが持つてるような本と似たような本が手元にあるが？あの本は・・・？

「ま、まあとにかくみなさんよろしくお願いしますよ！もうそろそろ島が見えてくると思いますので！」

と、アズトが大きな声で言った。

そのとき一番後ろに離れて座った男が口を開いた

「・・・漸く島か。漸く鬼と戦うことができるのか・・・」

その男は低い声でそう言った。

見た目は、頭から顔まで覆う兜を被っており、身体もすべて覆いかくすようなこの大陸に伝わる鎧とは意匠の異なる銀色に輝く鎧を身に付けている。

名前はミシル・タイナって言ったか。背丈は大柄でおそらくレンジより少し高いぐらいではないかと思う。兜を取ってないので顔と年はいまいちよくわからんが、声の感じからおそらくそんなに年はいってないと思う。20代半ばから後半ってところか。

等級は乙の上で得物は背中に背負った大剣だろう。

それはともかくこいつは今鬼と戦うって言ったか？

確かに全員武装してるがそれはあくまで島に生息する獣とか魔物とかへの備えだろ？仮に鬼が居ても調査が前提の依頼でこいつは何故戦うことが前提なんだろう？

そんなことを考えているとネクが

「ねえ、ホントに鬼族って居るのかな？」

と言ってきた。依頼を受けてからずっとこの調子である。楽しみにしすぎだろ、こいつ。

「多分な。会えるかどうか分からんが。」

古い本で読んだことがあるが、かつて、それこそ250年前か？には実際に鬼を見たこともある人が居るらしい。その当時の記録はあるからな。

ただ気になるのは、その当時からかなり文明が発達して今みたいに大して時間もかからずに行ける距離なのに何故今まで誰も行っていないのか。行く価値すら無いと判断したのか？

いや、もしかしたら行った人も居るかもしれないが鬼族に会ったという記録もない。何故その記録がないのか？それが分からん」

と俺の話を聞いていたのかアストが、

「ええ、もちろんヒノカさまの言う通り過去にも何回か行ったという記録はありますよ。」

ただ、それは海の途中で断念して引き返したりとか、予算の都合上だとか、島内の地理が険しいとか、様々な理由があるらしいです。それで結果としては悉く鬼族に会えなかったということです。

かつて鬼族に会えたのはスサノオ王率いる妖術師を含む優秀な調査団だけでスサノオ王や妖術師が居たから何らかの特殊な力を使って鬼族に会えたのでは、というのが今現在の最も有力な説です」

俺は、

「じゃあ、アストさんは何故今回はこの計画を実行しようと思った？過去に何度も失敗してるなら今回も失敗の可能性が高いと思うが？スサノオ王も居ないし、妖術師も居ないのに」

疑問に思っただけ聞いてみる。リシナさんが何か言いたそうにしたがアストが、暫く何かを考えるようにして、

「そう思われるのはごもっともだと思います……ここまできたなら正直に白状します。実は今回の依頼に関しては政府が大元

の依頼者なのです。

そして依頼書には便宜上、鬼族の調査依頼と書きましたが、実際の目的は違うのです。」

と言つので俺は

「目的が違う？」

じゃあ何のためにアズトさん、いや政府は結構な予算まで使つてこの依頼を行つたんだ？」

微妙に納得できないので聞いてみた。するとアズトは

「それは島に到着してから話そうと思つていましたが・・・いいでしょう。今からお話しします。隠すことでもないですしね。

実は今から約1週間前の夜に、これから行く鬼ヶ島で大きな光が観測されたそうなのです。一番近い町であるイグナの観測所から見られたので光った場所は鬼ヶ島に間違いありません。それに何か不吉なものを感じた政府つまり王ができる限りその光が何かを早く迅速に調査すべきだと判断し、イグナに拠点のある商人の私にイグナで人を募つて調べると私に命じたのです。

首都から調査隊が来るまでは時間がかかりますしね。何かあるか居るのか分からないので本当はまだ人数が欲しかったのですが、そういった事情により募集の延期が不可能だったので、募集を希望人数以下で打ちきつたのです。」

と教えてくれた。するとネクが、

「えっと、じゃあ鬼族に関しては何もなくていいということですか？」

と尋ねた。するとアズトは

「いえいえ、そもそも島のどこが光ったか分からないため結局は島全体を調べてもらうことになります。その過程であわよくば鬼族に遭遇できたら何かしら結果を残したい交流をしてみたい、とは当初から考えています。最低期間の1ヶ月とは島を調べながら回るのにそのぐらいはかかるだろうとのことでした。」

ネクが、

「わかりました。教えていただきありがとうございます。」

別にやることは変わらないようだし、何故急に鬼ヶ島へ行くのか理由がわかったのですっきりしました。」

と言う。アズトが、

「みなさま、そういう事情ですので、よろしくお願い致します。つと、見えてきました。あのうつすら見えるのが鬼ヶ島です！」

と進行方向を見ながら行った。感覚的にはあと20〜25分ぐらいで着くだろうと俺は見当をつけた。

それから適当に雑談しながら15分少したった頃、俺達が乗っている舟は鬼ヶ島まで数百mの距離まで近づいた。

アズトが、

「あと5分ぐらいで島に着きます！みなさん！準備はよろしいでしょうか！」

というので、参加者が各々返事をしたり身支度をし始めたりした。

「では、みなさま。島に着きましたらくれぐれもはぐれないように・・・」

と、アズトが注意事項を言おうとしたとき、

ドーーーーンッ!!!

という大きな音がし、それとほぼ同時に、舟のすぐ傍の海が大きな衝撃に襲われた。

第9話 大砲 (前書き)

少し間が空きました

第9話　大砲

それは唐突に起こった。

転覆こそしなかったものの乗っている舟は大きく傾き水飛沫が波となり舟を覆ったため、最初は何が起こったのかは一瞬分からなかった。

ただ、先程聞いた音と現在の状況を鑑みるに、乗っている舟そのものではなく、すぐ傍の海に何らかの攻撃を受けたのだということは分かった。

俺は舟の周りを見渡して、凡そ数百m後ろのほうに僅かに白煙を上げている舟が一隻見えた。

火の大陸では火の神剣の恩恵によるものか硝石がどの大陸よりも多く採掘される。

硝石はそのまま使わずに加工をすることによって火薬となり使うことができる。暦が始まる前ですらもほぼ全ての集落で加工方法は確立されていたのはこの大陸ならではの特性だとも言える。加工された火薬は様々な面で人々の生活に活用されている。

それは、日常生活において調理や風呂焚き、鍛冶などの火を使う作業の際に燃焼を促進するためというのが最も普遍的な活用方法であるが、一部の者にとっては別の利用方法がある。

例えば首都や街、大きな町などにある技術研究所では、過去の文献資料や遺物を基にした様々な研究、開発を行っているが（場所によって規模や求める内容の違いは勿論あるが）、その研究の中でも最

も急務とされるのが燃料、武器、この2つの確保、開発である。

まず燃料の研究の必要性とは何か？

それは移動の効率化、新たな移動手段の開発にある。

現在でも馬車などの移動手段はあるが、舗装がされていない山道等が各集落を繋いでいるため移動速度は決して早くない。辺鄙な場所にある村へ行く際にはその手前の村に馬車を預けることもあるぐらいいだ。

それゆえ一部の富裕層を除いて馬車の使用方法はあまり好まれていない。

そういった現在の状況により燃料を優先的に研究するのは必然とも言える。

そして、かつて数千年前にあつたとされる文明においては移動について驚くべき記録が遺されていた。

それはこの広大な大陸を僅か2日程度で縦断していたというものだ。現在でこそ約二十年前に確立された蒸気船の移動速度により海上の移動においてのみ、大陸の端から端まで約10日程度でたどり着くことができるが（海上で運よく魔物に遭遇しないことを前提として）かつては陸路を通じて大陸を縦断するには最低でも半年はかかると言われていた。

なので、各村や町の交流、非常時への迅速な対処などの理由から陸路においての新たな移動手段の確保、移動手段への燃料の開発は最も急いで確立すべき分野だとされている。

（ちなみに実物や絵こそ遺つてないものの文献から推測された移動手段の形は、車輪が2つないし4つある本体に動物を利用せず燃料を利用した数人でいど運べる無機物、車輪を利用せず移動手段用の専用通路が確保された数百人が一気に移動できる燃料を利用した大きな無機物が検討されている。

前者は普遍性はあるものの移動手段である本体の開発における途中過程が行き詰まりまた燃料の確保開発方法に検討もつかない状態で

あり、後者は蒸気船の応用により移動の原理や燃料は解析可能なもののようにも思えるが実は、現在ある道の整備且つ移動用の専用道の確保が先ずは先だという、大きな問題点を抱えている。

武器の開発については、新たな移動手段の発展と同じく大きな規模で研究が進められている。

基本的にこの大陸で武器というのは、魔物との戦闘用のものをことを指す。

倒しても倒しても絶滅することのない魔物、その発生源や発生要因は魔物の分布図を作成する際にも不明だったという話だが、人を襲ってくる以上はそれに対抗する手段を得なければならぬ上に素手の格闘のみでは限界があるので、より効率の良い武器の開発というものは必須となる。

対抗手段の主流としては剣術だが、遠距離からの攻撃ができる弓、石や刃物の投擲も戦法としてよく使われる。とつてき（鉄鉱石の採掘、鍛冶屋、警備兵、等は安定して職が得られるためなろうとする者は少ない）

なので、剣や弓等の武器屋は大抵どこの村にもある。だが、戦いの手段を持つもの自体は、人口の多い街ならばともかく人数が少ない村などは少ない、もしくは1人も居ないというところがあるため、例えば大量の魔物に襲われたり不意に襲撃を受けた際の対応等が懸念されている。

そんな状況の中、20年程前に火薬を利用した武器の開発をしてはどうかという声が上がリ、数年前試作品とも言えるものが完成した。それが大砲である。

大砲が現在の形となった経緯は（まあ、実物を見たことはなく村に來た行商人に話を聞いただけだが）首都近くの沿岸に置いてあった奇妙な形の彫像を調べていくうちにその用途が推測され、昔の文献を調べるとその彫像、弾の作成、使用方法が載っていて火薬や鉄を使用し、それを基にして完成にこぎ着けたという話である。

大砲の利点としてはその大きな威力、非力でも使い方が解れば誰でも使えることにあるが、欠点としてはその重量により持ち運び、移動が困難なことにある。

また、技術的、予算的な問題により現在のところ首都にしか製造場所がなく、他の町への移動には時間がかかるため完成した数個は未だに首都にあるはずだが、とそこまで考えて声がした。

「ね、ねえ今のって・・・」

ネクが不安そうに言うので「大砲だろうな。」

「やっぱり！でも、どうして!？」

このどうしてには2つの意味があると思う。つまり

「どうしてっていうのは、どうして海上に大砲があるのか。どうして俺達を、おそらくこの船を撃ってきたか、だな」

もう1つ疑問はある。

聞いた話じゃ大砲ってものの射程距離は最大で数十m、つまり視認はできるがあれだけ離れた距離から届いたのはどういう理由だ？

技術が進歩した？短時間で大幅に？あり得ないだろ。首都にある最先端の技術で漸く固定式、車輪式の大砲が完成したというのは、結構最近の、ここ数ヶ月程度の話だったはずだ。あり得ないだろ。いや、そんなことよりも、

ドーン！！！！

音がして今度こそ船に直撃したか、と思ったとき、船より約20m程手前で、砲弾らしき塊が空中で爆発した。見えないう壁でもあるように。

「えっ、何今の？途中で止まった？」

「止まったな。どうということだ？」

ネクと同様俺も全く意味が分からなかったので、だれか説明してくれないかとあたりを見回してみると、

「出来れば使いたくなかったんだけどね。流石にこの状況がしょうがないか。」

リシナが船の後ろ側、もう一隻の船の方向に両手をかざしながらそう言った。

よっぽど皆怪訝な顔をしていたのだろう（双子の姉妹は妙に嬉しそうだが）

慌てたようにリシナが続けた。

「つまり、大砲に狙われてると思ったので対衝撃用の不可視の壁を作ったんですよ。」

と照れくさそうに言った。と言われても・・・

「結界術の応用ってことよ！師匠は凄いんだから♪」

双子の姉アリナが胸を張って言う。

「結界術？つまり妖術か？」

俺が疑問に思い聞くと、

「古いなあ、言い方が。」

昔は確かにそういう風に言われてたけど、師匠は退魔師なの。だから厳密には退魔術って言うべきね！」

偉そうに言われた。

「成る程。どういう理屈か分かんが、その退魔術とやらを使って

砲弾を途中で止めたわけか。凄いな。でも退魔術つまり結界術は昔にその技術が失われたんじゃないかったのか？使い手が居なくなってる」

と言うと、リシナが

「ええ。確かにそうなんだけど、うちの家系は代々魔物退治を生業としていてね、様々な技法を研究していてその過程でかつて妖術と言われてたものの技術を確立したの。」

と言うが、そんなに簡単なものだろうか？

「まあ、とにかく助かりました。ただこちらへ攻撃した輩はまだあそこに居るので、取り敢えずどうしましょうか？逃げられるかどうか？」

・・・

アズトがそこまで言ったところで、

ブオーーーンッ！！

ドルルルッ！！！！

と言う音がした。

ネクと俺が、

「なんかあの船、どんどん近づいてない？」

「ああ、凄い早さだな。」

見ると先ほど変な音がしてから、船がこちらへ物凄い早さで接近している。

距離凡そ300m、200m、100m、50m、・・・

乗っているやつの姿が視認できるようになったので見ると見たこともない格好をしていた。派手な色合いの服、身軽そうな格好だ。

それに細長い筒みたいなものを手に持っているが、あれは・・・？
距離30m、20m、・・・

そこまで近づいたとき、

ミシィ！

という何かが軋むような音がして接近が止まった。

乗っているやつらが慌てたようだが、おそらく先ほどリシナが張った対衝撃用の壁にぶつかったのだろう。しかし結構な早さでぶつかって船に傷がないのはよほど頑丈な作りなのか？それにとんでもない早さだった。

あいつら（ざつと20人ぐらいか）が手に持った筒を此方へ向けた瞬間、

パンツパンツ！

という音が鳴り、見えない壁のあたりに小さい塊が一瞬止まり十数個の塊が海へ落ちた。

あの筒はつまり飛び道具か！火薬を利用した小型の大砲みたいなものか？

威力はいまいち分からないが・・・

「ダメね。そろそろ限界みたい・・・」

という声がかした。

見るとリシナが青い顔でつらそうにしていた。

「やっぱり、規模の大きな結界を張ると妖力まじまじをかなり使うみたい。」
と、しゃがみこんでしまった。つまり壁がなくなったということだ。
あいつらは間違いなく敵だろうな。しょうがない。

「ネク、俺ちょっとあっちに行ってくるわ。」

と言いながら、オーラを全身に纏わせて身体の強化を行う。

そして20m程跳んだ。

第10話〜疑問〜（前書き）

ようやくとりあえずの目標十話を達成しました。
これもひとえにご愛読いただいている皆様のおかげです。
今後とも、よろしければ拙作にお付きあい下さい。

第10話　疑問

~~~~~

私は、私という存在を為すものを殆ど全て失った。

あの日から・・・

~~~~~

あの日・・・ウォルス王国、その王族を護る立場である護衛騎士、その隊長である私ミシエル・オルレアンはいつものように王宮に出向き責務を果たしていた。武官長会議、部隊編成の相談、王家の食事の付き添い、など本当にいつもどおりの1日だった・・・その筈だった。

だが、それは突然起こった。

いや、やって来たというべきか。

夕食も終わり、1日の責務も別の者との交代時間が近づいていた、ということもあり多少私の気が抜けていたということを差し引いても、私の動揺は護衛騎士隊長にあるまじき対応の遅れに表れていた。王宮内、しかも王の寝室の扉の前にそいつは立っていた。私よりも一回りは小さく見えるその全身を覆う黒いローブを身に纏い、その右手には銀色に輝く杖を持っていた。唯一見ることが出来る肌の部分、両手とフードに隠された顔の下半分は驚くべき白さだった。

如何にしてここに？という疑問、あまりにも唐突すぎる出現、ということもあったが、何よりそいつのあまりにも異様な雰囲気には私は立ち竦んだ。

明らかな害意らしきものを持ってその場所にそいつは立っていた。だがそれも一瞬のことで、

「何者だっ！貴様っ！」

と、私がそいつへ向かって言うとそいつは

「貴方に用はないわ。邪魔をしないで頂戴。」

と丁寧な口調で言った。

若い、まだ少女と呼んで差し支えない女の声で。

「貴様っ！ここがウォルス王の寝室と知ってのことかっ！」

私はそう言いながら背中に背負ったバスタードソードを抜いた。

「勿論。王を消す為にここに來たのだから。面白いことを言うのね貴方？」

「貴様っ！！」

言うと同時に私は約5m程度の距離を一気に飛んで詰め、剣をふりおろした。

だが、

ギーンッ！

弾かれた。

何も持っていないあの細い左手で。

「な、なに？」

今起こったことが信じられなかった私は、更に剣を振った。何回も。何回も。

ギンッ！

ガギッ！

ガイッ！

しかし、全て左手に弾かれ、防がれる。

何者だ・・・いや、今はそんな場合ではない。

こうなれば、最も強力で速い技を出すしかないと思った私は、一瞬呼吸を整え・・・

「セイヤアッ！！！」

銅を狙った高速の一呼吸での三連突きを繰り出した。

ギンッ！ギンッ！ギンッ！だが、全て左手に全て弾かれた。

「ハアッ、ハアッ、まさかこんなことが・・・この私がこうも簡単にあしらわれるだ・・・？」

「ふうん。この国の剣技は中々のものね。消すのは少し勿体無いかしら。」

「き、貴様！消すとはどういうことだっ！？それに何故王の命を狙うっ！？」

「フフ、消すっていうのは分かりづらかったかしら？文字通り消滅させるのよ、この国を。何故？決まっているじゃないの、邪魔だからよ。王も国も。まあ、他の齒ごたえのないよりは貴方は多少ましだったから残してもいいわね。」

と、少女は言いながら

「まあ、貴方とのお遊びに付き合うのは飽きてきたからそろそろ終わらせるとしましょう。」

そう右言い、手に持った杖を此方へ翳しながら、

「フアング」

そう言った瞬間杖が物凄い勢いで太く長くなり、それが私の銅へ伸び私の身体は杖で壁に押し付けられた。

「ガハアッ！」

私はあまりの衝撃に声をあげながら、口から血を吐いた。

「あら、呆氣ないわね。まあ、私の波動に触れながら戦えるだけでも大した腕だけどね」

そう言う少女は杖を元の大きさに戻し左手を扉に向け、扉を吹き飛ばした。そして無造作に中に入ってしまった。

途端に中から、

「貴様、何者じゃっ！ミシエールッ！曲者じゃっ！ミシエールッ！」

というウォルス王の声が聞こえてきた。

「ウォルス王っ！」

お逃げくださいっ！！」

倒れ伏した私は氣力を振り絞ってそう叫んだ。だが・・・

「ぎゃーーーーーっ！」

という断末魔の悲鳴が聞こえてきた。

「ウォルス王ーっ！」

それを聞き私はウォルス王の死を覚った。

少しして、

「ふう、お掃除終わり。」

と言いながら少女が部屋から出てきた。

「き、貴様よくも、」

私は倒れた状態で少女を睨み付けながら、そう言った。

「ふふふ。貴方しぶといなだけじゃなく精神力も大したものね。」

何故か嬉しそうに少女が私を見てそう言った。

「殺してやるぞ、貴様あ」

「そうね。そのぐらいの気持ちならいつか辿り着けるかもね。貴方なら・・・」

「何を言っ、グハア！」

よろめきながら立ち上がったとした私を少女が杖で打ちすえ、私は意識を失った。

「まあ、貴方が生き残るかどうかわからないけど、可能性はあるわ

ね。」

少女は独りごちて、僅かに微笑した。

くくく

目が覚めたとき私は悪い夢を見ているのだと思った。何故なら目の前には、

「すつきりしたでしょう？」

後ろから声がしたが、

「な、なんと・・・い・・・う」

私は振り向かなかった。

何故なら、目の前の光景に目を奪われていたからだ。

「ど、どういうことだ・・・ここは何処だっ！」

私は混乱しながらも、後ろを振り返り少女に怒鳴った

「何処？貴方の祖国でしょう？いえ、正確には元祖国と言ったほうがいいかしら？」

その声を聞き、私はさらに混乱した。

あたり一面火の手が上がり、建物らしきものすらないここが我が国だと？

バカな！

「まあ、信じられないのも無理はないでしょうね。でも、」

と、少女が言いながら自分の真後ろを指した。
そこには、先ほどまで自分が居た城があった。ウォルス城が。

「ウォルス城だ・・・と？」

驚愕に満ちた目で私は城を見た。何故なら、城の周りにあるべきものが何処にもなかったからだ。

「バカなっ！！これがウォルス城なら他の建物はっ！！町はっ！城下町はっ！私の家はっ！」

「全部燃やしたわ。人々と一緒に。」

「ふざけるなっ！そんな戯れ言をっ！」

「信じられないのも無理はないけどね。こっやったのよ。」

と少女は言つと、城へ向かって杖を翳しながら

「ヘルブレイズ」

と言った。すると凄まじい規模のそれこそ城ぐらいの蒼白い炎が出現し、瞬く間に城を呑み込んだ。

「あ、あ、あ・・・」

「つまりこういう風にしてウォルス王国を燃やしたっていうこと。理解できた？」

私は目の前で起きたあまりに現実感のない出来事にただ呆然とした。

「あらら、分かりやすく説明したつもりだけど、驚かせたかしら？」

「き、き、貴様は、な、何者だ。な、何故こんな残虐非道な真似をするっ！！！」

「何故？先ほども言ったけど、邪魔だからよ。この国が。それに会いたいモノがあるから。私が何者っていうのは知らないほうが良いと思うわ。もし、いつか辿り着いたら自然と分かることだしね。」

「辿り着く？どういう意味だっ！？」

「そうね、可能性がある貴方には辿り着けるヒントぐらいあげましようか？」

「そう言う少女は少し寂しそうな顔をした。そして、
「まず私は、人間ではないの。そうね、この水の大陸や他の大陸での呼称で言えば亜人とか鬼とかデビルとか呼ばれているわ」

「そう言うとおもむろに被っていたフードを捲った。

そこには、長く伸ばした金髪に青い目をした一目見ただけでは人間の少女と変わらない顔があった。
額から出た角を除いて。

「まあ、見た目の違いと言っても角ぐらいだけだね。あと、年齢で言えば貴方の数倍は上ね。」

「貴様・・・何処からやってきた・・・？」

「言ってもいいけど・・・今の貴方には決して辿り着けないわよ。
それよりも、」

と、言うところ方へ杖を翳してきた。

「私を殺すつもりか？」

「まさか！折角可能性がある人に会えたもの。ただ今の貴方じゃ駄目ね。もっと強くなってもらわないと」

と、私の周りに光る文字が浮かび上がってきた。

「な、なんだこれは！」

「転送魔方陣よ。今から魔法で貴方を何処かの大陸に飛ばしてあげる。ちなみに貴方を倒したのも、城を燃やしたのも魔法によるものよ。」

「魔法だ・・・と？」

「そう。私は太古に失われた筈の魔法を使えるの。ひょっとしたら貴方も使えるようになるかもね。」

「ま、まで！私を何処へ！」

「さあ？まあ、人が居る大陸だとは思っけど。じゃあ、さよならね。再会を期待しているわ」

そして身体が光ったと思った瞬間、私は意識を失った。

目を覚ましたとき私は山中に居た。

そして人の悲鳴を聞いた。人が居ることと悲鳴の原因が気になりその場所へ行ってみると、1人の男が大きな一頭の熊に襲われていた。幸いなことに言うべきか私の騎士の鎧と愛剣は装備したままだったので、すぐさま熊を倒すことができた。

男に事情を聞いてみると、隣村に行商に行く途中に熊に襲われたしい。

現在自分の置かれた状況を把握するためその男と色々な話をした。どうやら、ここは火の大陸という大陸らしい。1日で様々な信じがたいことが起きすぎて頭が麻痺してしまっただけらしい。疑うこともなく私はその話を信じ、他に当てもないので男と共に行動させてもらうことに頼んでみた。

用心棒が欲しかったらしい男は二つ返事でその申し出を了承した。

男の名はアズト・ミタラと言った。

~~~~~

3ヶ月程前に自身に起こった出来事をミシエール（今は偽名としてミシル・タイナを名乗っている）は思い出していった。

思い出す契機となったのは先ほどの光景にある。

リシナと名乗った女が見せた技、あれこそあの少女が使っていたような魔法ではないのか？

呼び方は違うみたいだが、共に人智を越えた力という点では似たようなものではないのか？

それに、トウヤとか言ったか。あの少年は今、身体が光り普通では考えられない距離を跳んだが、あれも魔法の一種ではないのか。

この大陸には魔法が伝わっているのか？

当初アズトから鬼の巣窟に行く話を聞いたときはあの少女や魔法に

関して何らかの手がかりが得られるかもしれないかと思っただ、思わぬところから手がかりが得られそうな感触があり、ミシエールは密かに唇を歪めた。

くくく

船に飛び降りた途端乗っている奴らが手に持っている筒を俺の方へ向け、何かを飛ばしてきた。火薬の臭いがしたので、おそらく大砲を小さくしたような物だと俺は見当をつけた。

その武器らしき物からはかなりの速さで塊が飛んできた。だが、オーラで強化している俺の身体には傷一つつかない。すると、

「何故だっ！何故大砲も銃も効かないっ！！」

と、1人の男が言った。

「と言われてもな。大した威力じゃないしな。全然効かないが。むしろお前らに聞きたいがお前らは何者だ？あと何故俺たちを狙う？」

俺が聞くと、男は

「貴様のような小僧に話すことはないっ！死ねっ！」

と、懲りずに手に持った筒（多分銃というのだろう）を此方に向けて、塊を飛ばしてきた。だが、

「いや、だからその攻撃は効かないって言ってるだろ？そんな無駄

なことをするよりも」

と、塊を弾きながら俺は剣を抜きその男を斬った（手加減は一応した）

男は倒れ、他のやつは驚いた顔をしていた。「俺達を攻撃しているつもりなら俺は降参を薦めるぞ。」

と言いつつさらに近くに居た数人を斬った。

「質問に答えないとどんどんお仲間がやられるぞ。」

そう言うところの中で一番歳上らしき男が答えた。

「俺達は探索者だっ！失われたものを探している。貴様らを襲ったのは先を越されないため排除しようとしただけだ！」

「探索者だと？失われたものとはなんだ？それにお前らの技術だ。」

この船は何だ？何故大砲がついている？それにこの船はいったい何故あんな速度が出せる？」

俺は気になっていたことをまくし立てた。

「この船はレヴィアス国で最新鋭のモーターと武器を積んでいる。失われたものとは太古の・・・」

男はそこまで言って後ろの男達と何やら話しだした。

「キャプテン・・・どうやって・・・」

「・・・手持ちの武器だけじゃ・・・」

「逃げるにも・・・」

「・・・いつそのこと・・・」

と話してくる声が聞こえる。俺は、何となく納得できず、

「つまりこういうことか。お前らはとあるものを探している探索者で、それを手に入れるため目的の場所つまり鬼ヶ島に行こうとしたところ、先に俺達の船が見えたんで先を越されまいと、この大砲を積んだ船で攻撃してきたというわけか。それにしてもレヴィアス国とは・・・?」

と言った。

「あ、ああそうだ。だが鬼ヶ島だと?あの島は何らかの加護を受けているはずなのだが?」

「加護?ああ、加護という言い方をするならこの大陸は火の神剣の加護を受けているぞ。」

と俺が言うと、男は

「火の大陸だと!?バカなっ!?そんなはずはっ!?な、なら・・・我らは・・・間違っただというのか・・・」

驚愕に満ちていた。

「ん?火の大陸ならまずいのか?」

不思議に思い聞いてみると

「貴様には関係ない!」

と、焦っていた。その態度に軽くムカついたので、

「そうか。何を間違ったかよく分かんが残念だったな。

ただ、別に心配しなくていいんじゃないか？」

軽く深呼吸し、

「お前らはここで全滅するんだから、なあっ！！！」力を込めてオーラを放ってみた。

結果、

グオオーっという音とともにオーラの奔流がその船の男たちを襲った。

~~~~~

直接怪我こそしないまでも、その少年から迸るプレッシャーにより我が船の乗組員達は立つこともままらなくなっていく。

これはなんだ？圧倒的な力を感じるが・・・このままでは目的を果たせないまま・・・それだけはっ

決して目の前の少年に勝てないことを覚った私は、

「まで、まってくれ。君達に服従する！だから助けてくれ！」

命乞いをした。

すると、

「へえ、判断が早いな。」

プレッシャーが止んだ。

「まあ別に殺す気はなかったけどな」

そう言つと少年は無邪気に笑つた。

「とにかく、あんたらの存在とか目的とかが分からなさすぎる。服従とかはどうでもいいが、知っていることを全て喋ってもらおうか？」

「あ、ああ。私も知りたいことがあるしな。勿論話そう。」

こうなつたら仕方ない。本来他国の人間に言うべきではないが・・・あの島にはあれは存在しない可能性が高いが、命を失うよりはましだ。まあ、殺されなかったかもしれないが・・・

「とりあえず、その手に持つてる物は渡してもらおうか？」

「勿論だ。そもそもこんな物では君に傷一つつけられないしな。おいつ！」

私は、乗組員に銃を渡すように促した。それを袋に入れ少年に全て手渡した。

「俺より遥かに色んな知識を持った奴があつちには居るからあつちで話そう。あつちまで船を寄せて乗ってくれ。あんたに危害は加えないから」

「ああ、分かっている。ただその前に一つ聞かせてくれないか？」

「ん、なんだ？」

「先ほどの君の力、あれはいつたい・・・？」

「ああ、あれはオーラだ。一応説明すると、オーラっていうのは人が体内に秘めたエネルギーのことだ。それを体外に出し自分の力として肉体を強化したり、具現化したり、放出したりするなど色々な使い道がある。」

「そうか、あのプレッシャーはそういうことか・・・それで銃も効かなかったのだな。」

「やっぱりあれは銃っていうのか。それはともかく俺もあんたに聞きたいことがある。」

「なんだ？この期に及んで隠し事はしない。」

「先ほど言っていた（失われたもの）とは一体何だ？気になるんでとりあえずそれだけ教えてくれ？」

なるほど私は頷いて、

「その失われたもの、というのは、つまり太古に存在していたとされるものだ。」

「太古に存在していた？」

「ああ。実物を見たことはないが、私の国レヴィアスでは建国当時よりそれを崇めている」

「崇める？つまり火の大陸で言うところの神剣みたいなものか？」

「神剣？七つの神のことか？」

「そうか・・・火の大陸では剣として伝承されているのか。まあ、どちらが正しいのかは判断のしようもないが。」

船が少年の船に接した。

「いや、1人で頷いてないで説明しろよ。何を崇めていたっていうんだ？」

「神だよ。ただ火の大陸と違い、剣ではなく獣だがね神獣しんじゅうと呼ばれるものだ」

「神獣？」

「そうだ、神獣レヴィアタン、水を司るとされている伝説の獣だ。」「
そこまで話したところで、私は少年と共に少年の船へ移動した。」

第11話 探索者たち (前書き)

大した違いはないですが、サブタイトルが今までより少し長くなりました。

第11話 探索者たち

~~~~~

『大いなる守護者により、この地は護られている。

かつて大地は荒れ果て、海は猛り、およそ生物と呼べるものはその存在さえ叶わなかった。

だがある日、この地に神が舞い降りた。巨大な水龍に姿を変えたその神の御力により、川は流れ出し、大地が潤い、生物が生まれ落ちた。この地と肉体を分けた彼の6大陸と共に。

我らは決して忘れてはならない。今こうして我らが在るのは水神の御加護によるものだということを』

レヴィアス国聖書より抜粋

~~~~~

「つまり、その祈禱師^{きとうし}とやらの御告げに因って、貴方達はこの島を目指して来た、というわけですか？・・・しかも私達を略奪者と勘違いして攻撃してきたと？」

アズトは憤慨しながらそう言った。まあ、怒るのも無理はないだろう。こちらからすれば、いきなり大砲をぶっぱなされて殺されかけたのだからな（リシナがいなければ間違いなく船に直撃していた）

言われたガルディアは、

（先ほど自分のことをレヴィアス国レヴィアタン探索団団長ガルディア・ソーイと名乗った）

「そのことに関しては申し訳ないとしか言い様がない。だが、我が国が置かれた状況も察していただけると助かる・・・」

若干すまなそうに言い訳がましく言うが。口だけならなんとでも言えるからな。それにしても、

「まあなんだ、その隣国のウォルス王国だっけか？そこが一夜にして壊滅、いや消滅して、早急に対応策を練る必要性があるっていうのは分かるが、他にやりようがなかったのか？」

と、レンジが疑問に思ったことを言った。

「他に、と言ってもな・・・我が国の王や知恵者、科学者などが全員で相談しても一体何が起こったのか見当もつかない様子だった。」

ガルディアは答える。

が、俺は改めて考えた。

そんなことがあり得るのだろうか？

聞いたらウォルス王国というのは、国土こそ火の大陸の5分の1もないが、人口は約10万人程度しかも文明は明らかに火の大陸より進んでいるであろうレヴィアス国と遜色ない程度だったということだ。建物も木造はあまりなく土を練った硬く燃えにくく崩れにくい材質だったらしい。

もし、ガルディアの話が本当だったとしたらどうやってそんな状態になったのか全く見当がつかないというのは理解できる。

「襲われたことはともかくとして、あの島に何かありそうなのは確定だな。」

俺はそう納得した。いや、おそらく俺以外も皆納得している。が、

「いやいや、それは確かにそうかもしれないけどっ！でもこいつらはあたしたちを殺そうとしたのよっ！」

ネクがガルディアのほうを見ながら興奮した様子で文句を言う。

「まあ、そうだけどなあ。でも、こうやってみんな無事だったし。それに正直鬼ヶ島で何があるかは全然分かってない状態だから少しでも戦力はあったほうがいいと思うぞ？しかもレヴィアス国の技術は大陸に持ち帰ったら丸を稼ぐよりも割がいいんじゃないか？」

「うっ・・・」

俺の説得(?)によりネクは納得できたのか口をつぐんだ。すると、

「いやあ、それにしてもトウヤさんがあれだけ強いとは思いませんでしたよ。」

アズトが妙ににこにこしながら言った。

アリナが、

「そうね、ちょっと離れてよく見えなかったけど、それでも凄い速さで動いてた。何人も一撃で倒してたし。いきなりあの距離を跳んだときは一瞬何が起こったか分からなかったよ。」

と、言った。

俺はそこまで本気でやったわけでもないし驚かそうと思ってやったわけでもないのだが。とりあえず一件落着いたからよかったんじゃないかな。

横でガルディアが苦虫を噛み潰したような顔をしているのはさておいて、

「まあ、さつさと行って片付けたほうが安全だと思ってやっただけなんで。それよりもリシナさんのほうが凄かっただろ？」

「師匠はねえ。確かに凄いけど、もうその凄さに見慣れたっていうか・・・師匠なら間違いなく何とかしてくれるっていうか・・・特に驚くことでもないんだよね。」

そう誇らしげにリシナのほうを向きながら言った。

「私も大砲ぐらいなら何とかなると思っていましたからね、退魔術で。ただ、防いだあとはどうしようかと考えてなかったので助かりました。」

此方を微笑みながらリシナがそう言った。

「まあ、こいつらの処遇に関しては、降伏したんだしこのまま上陸して一緒に調査をしたあとで考えたらいいんじゃないかねえか？」

レンジがそう言うのと、リクオが、

「そうですね。ただ単に割のいい仕事だと思ってたら雰囲気は怪しくなってきたんで、仲間は多いほうがいいですね。」

と言った。話を聞くうちに光の正体がいよいよ得体の知れないものに思えてきたのだろう。神獣って。

俺も神獣をどう調べればいいのかさっぱりだしな。

「ああ。此方は殺されても仕方ないぐらいのことをしたので、殺されないのなら勿論協力させてもらう。正直な話を言えば大幅な戦力増強になるのでとても助かる。」

ただ・・・」

ガルディアが言いにくそうにしたので、

「なんだ？」

レンジが促すと

「島内を調査したあと、もしその光の正体がレヴィアタンだったら、我々を解放してくれないか？国に戻りどうしても報告しなくてはならない。」

勿論相応の見返りは支払う。現在、我が国は大変押し迫った状況にある。平たく言えばいつ得体の知れない輩に襲撃されるか気が気ではないのだ・・・だからどうしても結果を報告する必要がある。」

「うーむ・・・どうするよ坊主？」

レンジが何故か俺に振った。坊主って。俺はそんなに子どもに見えるのか？

確かに、実際に降伏させてこの船に連れてきたのは俺だから分らないくはないが・・・しょうがないな。

「いいぞ、ガルディア。解放してやる」

「ほんとかつ！感謝する！」

「ただし、俺も連れていけ。他の大陸それも文明が進んだ大陸を見てみたい。」

「あ、ああそれは構わないが、あの最新式の船でも片道で約1週間かかるぞ。国でも用事を済ませるのに少なくとも10日ぐらいはかかるからこちらへ連れ帰るのは一ヶ月ぐらいはかかるぞ。いいのか

「？」

「ああ、構わない。」

「あたしも行くっ！相棒のあたしも忘れないでよね！」

急にネクが言い出した。相棒ってお前・・・この仕事が終わったら別行動しようと思ってたが、別に断る理由がないな。

「だそうだ。ガルディア、いいか？」

「大丈夫だ。」

「あのー、私も連れて行ってもらえませんか？それともう一人。」
今度はアズトが言い出した。ガルディアとミシルのほうを交互に見ながら。

「アズト？あんた仕事はいいのか？」

「いや、むしろ稼ぐために行きたいんですよ！そもそも水の大陸まで行くにはカグツチにある最新式の蒸気船でも片道一ヶ月は早くてもかかりますからね。それに伴う費用が尋常じゃないですよ。ガルディアさん、あの速度と大きさの船なら少々の荷物は大丈夫ですよね？」

「ああ、人があと何十人か乗っても余裕がある。その点については問題ない。」

「じゃあ、よろしく願いますっ！」

旅費やら護衛費がかからずに莫大な費用を使わずにいける、とか言うアズトの声が聞こえてくるが、気にしないことにした。

ガルディアがミシルを見て

「その男もだな・・・全部で4人か。まあ、こちらとしては断われる立場でもないし、特に問題はないのだが・・・それとは違うちよっとした疑問というか謎というか・・・」

言うべきが言わざるべきかという風にガルディアが言い淀んでいた
ので、

「どうした、ガルディア？どういうことだ？」

聞いてみると、

「いや、な。その男、もしかしたら水の大陸の者ではないかと思っ
たのだが。」

と、ミシルを見ながら言う。

「何故だ？」

「うむ。先ほど言った水の大陸の国の1つウォルスの騎士があ
の男が持っているような大剣を好んで使っていたからな。ただウォ
ルスはもうないし移動手段やウォルスの国交を考えてもこんなところ
に居るはずがないと思っ
てな・・・」

こいつは水の大陸から来たのか？と思っ
てミシルを見てみたが、

「・・・・・・・・」

ミシルは何も言わなかった。

「ま、まあそれはどちらでもいいじゃないですか？そんなことより

も時間が惜しいので早く島へ行きましょう!」

アズトが僅かに慌てたように言った。確かに早くしないと時間もつたいないな。夜になったら調査どころじゃないし。

皆が顔を見合せ頷き、

ガルディアが、

「お前ら島へ行くぞつ!!この船に付いてこいつ!!」

自分の船へ叫んだ。

~~~~~

あのガルディアという男、そう言えば何年か前に見たことがあるな。レヴィアスのウォルス担当の行商人のお供か何かだったか。先ほど黙っていたのは別に素性を知られたくないとかじゃなく、単に我が身に起こったことを説明できなかっただけだ。いや、できなかったというよりむしろ説明しても信じないだろうと思ったからだ。特に不都合はない。

それにしても神獣か・・・あの少女もその類のものだったのかもしれないな・・・

ミシエールはそこまで考え他の者と一緒に上陸の為の準備を始めた。

~~~~~

そして、

俺達は漸く鬼ヶ島へ上陸した。総勢20人。

ガルディアの船には19人乗っていた。その内何故か未だに立てないやつが5人その看病で1人もう2人は船の管理、整備のために残

した。つまり上陸したのはガルディアの船からは11人（銃はとつくに返している）、俺達は9人だ。

話してみても俺達を殺すよりは（無理だろうが）協力したほうが遥かに効率的だと考えたのだろう。皆協力には納得していた（俺のほうを見て若干怯えていたが）

そして、調査の効率を上げる為に班分けをした。

もし戦いになった際に強さや連携、親しさのバランスも考えた結果、

1班

俺、ネク、アズト、ミシルガルディア（この期に及んでないと思うが万が一の裏切りに備えて俺と一緒にした）

2班

リシナ、アリナ、ユリナ、ガルディアの仲間二人

3班

レンジ、リクオ、ガルディアの仲間三人

4班

ガルディアの仲間五人（1人は副団長とか言っていた）

以上の五人ずつ4つの班に分けて、東西南北へそれぞれ進むことにした。

再会は船があるここで3日後の予定。もしそれまでもどれそうにない場合は合図を送る（火薬を利用した技術で狼煙という物をガルディアからもらった）ことにした。

さあ、行くか！

鬼が出るか神獣が出るか？楽しみではない。

探索者20人は4方向へそれぞれ歩き出した。

第12話 守護者

~~~~~

己の領土内に侵入したモノを感知したソレは、数百年の間何回か繰り返した作業を行うため、侵入したモノの方角へ移動を開始した。金属の身体を持つソレは錆びることなく、壊れることなく、今から己のやることに疑問を持つこともなく、いつものように己に与えられた唯一無二の義務を果たそうとするだけだった。

己の義務、すなわち侵入者の排除を・・・

~~~~~

「さ、殺風景というか何という、か・・・行けども行けども岩しかみ見えませんねえ。はあ、はあ。ほんとにこの島には何か住んでいるので、しょうか、ふう、ふう。歩くのが、け、結構きつく、なつて、きましたよ。ふう、ふう」

アズトが息を切れ切れにさせながら横から言ってきた。出発してから小一時間ぐらいいは経ったとは思うが、まだ大して進んではないぞ。でこばこした岩山を登ったり降りたりしてるだけでそんなに息切れしなくても。

ただ、歩くだけで暇なんで

「そうだな、ここまで進んで分かったことと言えば、このやたらと続く岩山には生き物が居ないっていうことと、アズトが意外におっさんだったってことぐらいか・・・」

真面目な顔で軽く言ってみると、

「わ、私の体力がないのはべ、別に歳のせいじゃありません！いや、商売で、それなりに色々な僻地へ、行ったりするんでむしろ体力はあるほうです！そ、そもそも私はまだ29です！」

と、やたらと興奮していた。おっさんは禁句なのか。

「まあまあ、落ち着いてアズトさん。どうせこいつのことだから暇潰しにおちよくっただけだと思うわよ。だから、あんまり気にせずに。」

とネクがとりなすように言った。付き合い長いだけあって俺のことがよく分かってるなこいつ。

「むう。それはそれで何か納得が行きませんが・・・」

アズトが唸りぶつぶつ言っていた。

ちなみにガルディアとミシルは何も喋らず黙々と歩いている。

「ま、あたしはこいつの言動に慣れてるからね。多少何か言われても気にしないけど。」

ネクが何故か自慢げにそう言つとアズトが、

「そうですか。やはり夫婦ともなると性格も何を考えてるかもよく分かるものなのですね。」

うんうんと何か1人で納得していた。ん？聞き間違いか？今、

「べ、べ、別にこ、こいつとあたしはぶ、夫婦なんかじゃないわよ

っ！か、勘違いしないでよねっ！ねっ？トウヤツ？」

そう、やっぱり夫婦って言ったよな。そんなバカな。それにしてもネクもそんなに顔を真っ赤にして怒らなくてもいいんじゃないか。よっぽど夫婦と言われたのが気に入らなかったんだろうな。よし、

「そうだぞ、アズト。どう見たら俺達が夫婦に見えるんだ。俺達はただの幼馴染みだ。」

フォローしとかないとな。

「・・・そうよ、アズトさん。あたし達はただの幼馴染みよ・・・」

何故か頂垂れながらネクがそう言った。

と、ガルディアが

「一つ気になったんだが、君たちは見た目に反して結構年齢が上なのか？」

聞いてきたので、俺が、

「見た目に反してっていうのは気になるが・・・俺は15歳だ。ネクも。」

言々とガルディアが、驚いたように

「そ、そうか。やはりそのぐらいか。アズト氏が夫婦と勘違いするからてつきり20歳前後ぐらいかと。」

「ん、ということはレヴィアスではそのあたりの年齢にならないと

結婚できないのか？」

聞いてみると、

「ああ、正確には18歳からだかな。」

「なるほどな。ちなみに火の大陸では15歳からだ。そのへんの決まりごととか、文化の違いも興味深いな。」

そうやって俺達は互いの文化の色々な違いなど様々な話をしながら岩山を進んでいった。

そうこうするうちに漸く岩山の切れ目が見え、岩山を降りた先にはやたらと広い平原に辿り着いた。平原の向こう側に森らしきものが見える。

「やっと岩山がおわりましたね！」

アズトが本当に嬉しそうに言った。

「確かにやたら長かったな。まるで・・・」

ガルディアが何やら考えこんでいる。気になった俺は

「ん？どうしたんだ、ガルディア？何か気になることでも？」

「いやな、岩山がいくらなんでも長すぎたと思ってな。まるで、外部からの侵入を防ぐような・・・要塞みたいな島の構造だと思ってな。」

「ああ、なるほどな。言われてみれば確かに。あの岩山なら馬車は確実に使えないし、外から狙撃っていうのも難しそうだな。」

俺が同意すると、アズトが

「いよいよこの島に何か住んでいる可能性が少なくなってきましたね・・・この島から他の場所に移動するのに手間がかかりすぎますからね。」

若干落ち込んだように言う。

「まあ、まだあの森の奥とかに誰がいるかもしれないから諦めるには早いんじゃないか？光ったと思われる場所も見つかってないしな。」

少し可哀想になって俺は言った。アズトにしたらこのまま何も見つからずに手ぶらで帰ったら大損害だろうからな。まあ、まだ日にちもあるし、

とガルディアが

「おそらく大丈夫だとは思うが。祈祷師が指し示した場所の信憑性は高い。確実にこの島に何かはある。生き物もないような場所を指し示すというのは考えられない。」

今まで一切生き物を見ていないというのは確かに気になるが・・・」

「まあ、諦めるのは島内を隈無く探して何も無いと分かってからでいいんじゃないか？今はとにかく先にすすむ」

そこまで言ったところで、俺は何かとても嫌な雰囲気を感じた。ので平原の半ばあたりを見てみると、いつの間にか見たこともない、銀色の物体が立っていた。それを見た瞬間ざわっ、と背筋が粟立つような感覚を覚えたので、

「みんなっ！伏せろっ！」
俺は他のやつへ叫んだ。

~~~~~

ソレは森の中から平原を挟んだ向こう側の様子を見ていた。岩山に何者かが入った途端感知可能な己のセンサーが感知したとおり、岩山を越えて侵入者が平原まで辿り着いていた。

数は五体。平原の距離は凡そ700m程度。己の侵入者排除機能の射程距離は500mはある。

常ならば平原を半ばまで進んで待ち構えておき侵入者が岩山を降りると同時に排除機能を使用する。だが今回は侵入者を感知してからここに辿り着くまでがいつもより遅いのか侵入者を視認したときは己はまだ森の中だった。

何かいつもと違う点があるか？一瞬そういう考えが己の回路にうかんだが、すぐにそれを打ち消し、自動で目標つまり侵入者が射程内にはいるように音もたてずに移動を開始した。

そして平原も半ばまで進んだソレは侵入者へ向けて排除機能を作動させた。

~~~~~

俺の焦った声に何かを感じ取ったのか皆が一斉にその場に伏せた。と同時にその銀色の物体の銅あたりから青く光り輝くものが照射された。先ほどまで俺たちが立っていた高さの場所に。

伏せたおかげでその青い光は誰にも当たらなかったが、俺たちの後ろに立つ岩山に当たり岩の表面が抉れていた。

「い、今のはいったい？」

「伏せなかったら明らかに致命傷を負っていたぞ。」

アズトとガルディアが伏せながら話しているのを尻目に俺は銀色の物体へ向かって駆け出した。

距離がだいたい300〜400mか。10秒ちよいぐらいはかかる。

〜

ソレは最初、己の認識機能に異常があるのかと思考した。かつて己の侵入者排除機能「イレイザー」を使用して斃れなかった侵入者などただの1体も存在しなかった。だが今、イレイザーを使用する直前に侵入者の5体はまるでイレイザーが当たる位置を知っていたかのように地に伏せかわした。それどころかその内の1体は凄まじい速さで此方へ近づいてくる。己の義務を果たすため、ソレは再度イレイザーを放った。その近づいてくる1体へ向けて。

〜

丸太を2つ立てて、縦に繋ぎ（太さは丸太よりは一回り太いぐらい）それより細い棒を人というところの手や足の位置に生やしたような感じの形の（長さは丸太1mずつぐらい手足の位置にある棒は70〜80?）銀色の物体が此方へ向けて先ほどのように青い光を照射しようとしている。

一気に走って距離は凡そ10mぐらいまで詰めたが走りながらじゃ回避が間に合いそうにないな、これは。

思った瞬間、光が再度照射された。

〜

煙が巻き上がり視認が不可能だが、この至近距離からのイレイザーなら確実に捉えた、と判断しさらに他の4体を排除するためにソレ

は岩山のほうへ進んだ。
否、進もうとした。
だが、

近づいてきていた1体が先ほどと変わらぬ姿でそこに立っていた。
そして己がその姿を視認した瞬間、その1体が一気に己の頭上まで
跳んで近づくと同時にそれまで腰に差していた金属を振り下ろした。
その瞬間ソレは思考する機能を失った。

~~~~~

オーラの使い方には大別して2つある。

1つは自らの体内から練り上げたオーラを使い、身体の筋肉や神経、  
手持ちの武器防具を強化し攻撃力や防御力、速さ等、威力を底上げ  
する方法（体気術と呼ばれている）

もう1つは、自らの体内から練り上げたオーラと大気中に浮遊して  
いる精気（プラーナと言われるもの）を混ぜ合わせ、自らのオーラ  
のみよりも強大な威力を発揮できる方法がある（大気術と呼ばれて  
いる）

俺は銀色の光の照射が此方へ当たる直前に大気中の精気と自らのオ  
ーラを混ぜ合わせた大気術を使い身体の防御力を大幅に上げたため、  
光の直撃を受けても特にダメージはなかった。

さすがに自分のオーラだけで受けてたら立ってられなかったかもな。  
それにしても・・・

「それは一体何なんでしょうね？見たところ大きな金属の塊にしか見えませんが・・・」

と、いきなり攻撃してきた銀色を倒した後、安全を確認して後ろに居た他のやつを呼び寄せ、考え事をしながら来るのを待っていた俺に追いついたアズトが尋ねてきた。

「ああ。俺も遠目には変わった生き物が居るぐらいにしか思ってなかったが、近くで見ると・・・何だこれ？真つ2つにしたが、血らしきもの出てないし。ガルディア、これが何なのか分からないか？」

俺は銀色を指しながら、同じように合流してきたガルディアに尋ねてみた。

「いや、レヴィアスでもこのようなものは見たことがない。ただ・・・」

「ただ、なんだ？」

「金属が動く、というのは見たことがある。」

「ふーん。これとは形が違うのか？」

「そうだ。まだ実用化の目処は立っていないが、自走式貨物車と呼ばれるものが現在研究されている」

「自走式貨物車？それを木じゃなくて金属で作るのか？」

「そうだ。木よりも頑丈で腐りにくいからな。ただ自走式ならでは馬力がある大きな動力装置を使う必要上、どうしても本体を巨大にしなくては作れない。そんな巨大な貨物車を何処にどうやって移動させるかというのが現在の課題だ。それにそこまで詳しいことは分からないが、仮に作れたとしても前後に移動する、という機構を組み込むぐらいが限界だろうと思う。

だから・・・」

「仮にこれが金属だしたら、どういう仕組みでこの大きさで自走し、しかも攻撃までできるかというのはまったく分からない・・・」

「そういうことだ。それにしても、トウヤ。」

探索者というのはやはり好奇心旺盛なのか、俺が真つ2つにした箇所を色々な角度から眺めたり触ったりしながら話していたガルデアが不意に俺を振り返って言った。

「なんだ。」

「やはりトウヤの強さはめちゃうかな。この金属は鉄ではないにしろそれに近い固さだぞ。それをこんな風に剣で綺麗に真つ2つにするとは・・・」

「そうか？そのぐらいの固さならネクも出来るぞ？なあ、ネク？」

俺の横にいつの間にか立っていたネクへ話を振ってみると、

「えっ？あ、ああ、うん。鉄ぐらいの固さだったら斬れるわよ。」

「だよな。通常でも鉄ぐらいは斬れるよな。」

この場合の通常とはオーラやプラーナを使わない状態のことを指す。すると、ガルディアが

「なんというか・・・火の大陸ではそれぐらいの剣術の腕は当たり前なのか？レヴィアスでいうと、騎士並みの実力だぞ。いや、騎士でも何人が斬鉄をできるか・・・」

鉄を斬ることを斬鉄っていうのか。そのままだな。  
一応補足しとくか。

「いや、火の大陸全部じゃないと思うぞ。俺たちの出身の村では剣術が盛んだったってだけだ。」

「いや、それにしてもその若さで・・・凄まじい腕だな・・・」

何かガルディアが落ち込んでいる。まあ実際俺の腕を目の当たりにしたからな。

「むっ？これは？」

と、ガルディアよりも念入りに銀色を調べていたアズトが何かを發見したような声を出した。

「どうした、アズト？何か見つかったのか？」

聞いてみると、

「ええ。全身銀色の金属なのにここだけ色が違うのでよく見ていたんですよ。」

と言って丸太の繋ぎめあたり、人でいうと丁度臍のあたりになるのか。

よく見てみると、そこには

「宝石？」

赤く輝く真つ2つになった宝石らしきものが埋め込まれていた。

~~~~~

???

「守護者がやられただつ！」

「いえ、やられたかどうかは分かりません。正確には反応が途絶えたのです。」「反応？精石の反応か？」「はい。通常ならば精石の反応が途絶えるのは考えられない事態です。私もこの250年間の話を色々とお知っておりますがそのようなことは初めて聞きました。」

「そうだな。確かに俺も初めて聞いた、反応が途絶えるなどと。」

「ですから考えられるのは、精石自体の効力が長年の酷使により切れたか、侵入者がこの島に入り守護者を倒し精石を壊した、という2つの可能性です。」

「前者は考えづらいな。口伝に因れば精石はプラーナを取り込み半永久的に使用可能らしいからな。だとすると、やはり・・・」

「侵入者ということになります。」

「しかしっ！あの守護者だぞ。そう簡単にやられるか？」

「分かりません。ただ、もし守護者すら倒せるような侵入者がすでに大平原あたりまで迫っているとなると・・・」

「ここまで来るのは、あと1日つてところか。あいつらはどうした？」

「あの2人はいつものように島内を散策してますよ。」

「またか・・・いつ帰ってくるかは、分からないよな・・・？」

「見当もつきません」

「はぁーーーーっ」

「溜め息は女性が逃けますよ。」

「そこは女性が、じゃなくせて幸せが、にする配慮をしろっ！」

「それはともかくこの守りは手薄ですね」

「ああ。侵入者の目的は分からんが、守りを固めんとな・・・」

「目的はほぼ間違いなくあれだと思いますが。」

「それは言っなっ！もしかすると違つかもしれないだろうが」

「・・・」

「分かった。あれが目的だと認めよう。だからその目をやめろっ！」

「あれだけは何としてでも護らなくてはなりませんからね。下らない現実逃避はやめてください。」

「お前は本当に厳しいな。ああ、分かってる。あれだけは何としてでも護るさ。」

「勿論私も護ります」

そこまで話すと2人は自分達が今居る神殿、その中央の祭壇で体長50？程度の光輝く獣がすやすや眠っているのを眺めた。

~~~~~

## 第13話 柱（前書き）

最近はどうも時間が取れずに投稿が遅くなりがちです。

### 第13話　柱

クロカゲ家は元々護衛を生業としている。

アリナとユリナの父親は2人の娘が物心ついた時から同じように護衛の為の術を教えているが、双子とは言え生来持つて生まれたものが違うのか、成長するに従いその2人の性格と共に能力、性質の違いがはつきりと表れ出した。例えばアリナの場合は運動神経が良く格闘も出来るがユリナはあまり良くなくあまり戦いには向いていない。アリナにはオーラの流れがよく見えないが、ユリナは自分のものも良く見える。などわかりやすいところで例が挙げられる。

鍛え方としては、父親は初めの頃こそ同じように教えてはいたもののお互いが出す結果に余りにも偏りがあるため、やり方を変えてそれぞれで長所を伸ばす方針にした。その長所つまり本人達にとって得意なことのみをやった。その結果、12歳になる頃には、アリナは格闘や何種類かの武器の使い方を、ユリナはオーラを利用するための基本的な下地が出来ていた。とは言えまだまだ、発展途上にある2人をさらに上達させるため、甘えを無くすため、あわよくばお互いに足りないものを身に付けさせるため、知り合いの家へ2人とも預けることにした。

預けるには理由があつて、まずそこが心安い知り合いの家だということ、そしてその知り合いは退魔術という戦いや魔物退治に大きな対抗手段を持つて生業としているからである。

リシナ・トゴウが預けられた2人の少女を現役退魔師である父親から面倒を見るように言いつけられて、自らの身に付けている術を教えたのにはそういう経緯があつた。

くくく

「ーしよう。しよう。」

初めて二人の姉妹が家に弟子入りしに来た時のことを振り返りながら歩いていると、後ろから声をかけられた。

「なにかしら？」

リシナはアリナのほうへ向き直り尋ねた。

「うん。さつきからユリナが結構きつそうで・・・出発してからもうかれこれ2時間は歩きつぱなしじゃない？もうそろそろ・・・」

アリナが遠慮がちにユリナのほうを見ながら言う。

「そういえばそうね、ごめんなさい気づかなくて。なら、そろそろ休憩にしましょうか？お二方もそれでよろしでしょうか？」

アリナと少し顔色の悪いユリナへ声をかけ、さらに後ろから歩いてくるレヴィアス団の男性二人にも尋ねてみた。

「我々は、貴女のご判断にお任せします」

と一人が言うので、休憩を取ることにした。

「それにしても、何もない場所だね。ほんとにこの島に何かあるのかな？」

アリナが周りを見渡しながら言った。

「そうね。上陸する前に見た感じだと島の両端が見えないぐらい広かったから、相当な広さだと思うわ。4班に手分けして探すというのは正しい判断でしょう。アリナちゃんが言うように何もなければいけないわね。それに3日後には入口まで戻らないといけないからあまり奥深くまでも進めないわね。」

私がそう言うと、

「・・・でも、生き物の気配もしない」

多少体力が戻ったのかユリナが言った。

「そうね。それは私も思ったわ。いくらこんな道でも虫とか小動物が居てもおかしくはないわよね・・・」

私は、歩いてきた荒れ果てた道を見ながらそう言った。無人というのはともかく生き物一体いないというのは不自然、というより変だ。

まるで、

「・・・まるで結界が張ってあるみたい」

ユリナがそう言った。やっぱりそう思うわよね。そもそもトゴウ家の退魔術というのは、魔物を退治するよりもどちらかといえば不可視の物理結界を張り魔物を押しとどめたり封印したりするほうに本領を発揮する。なので、結界術や封印術の修行を重点的にすることになるため、自分でできるようになるのはもちろんのこと、他者が行った術も違和感を感じたりと結界が張ってあるかどうかが感覚的に分かるようになる。ただ、術者が己以外を排除する種類の結界を張っているなら、その場所は違和感どころではなく、前に進もうと思っても進めない程の圧力がある。ここまで何の違和感もなしに進めたから結界が張ってあるというのは考え難いけど、もしかしたら・・・

「・・・私たちが島に入ってから結界を張ったのかも・・・出られなくするため・・・」

「私もそれは考えたわ。でもそれだと、どうやって私たちが島に入った時が分かったのかしら」

私が、ユリナの考えに疑問を持つと、

「あのう、我々の砲撃音のせいではないでしょうか・・・」

と、現在私たちの班員である男性の1人がおずおずと言いだした。

ああ、そういえば・・・

「そうだよー。おじさんたちが有無を言わず攻撃してきたもんね」

若干からかいの口調でアリナが答えた。

「ええまあ、あれはなんと言いますか・・・」

申し訳なさそうに男性が答える。

「そうですね。あの時結構大きな音がしましたね。いくらこの島が広いと言っても音が響いたかもしれませんね。ただ、あれはもう気になさらずとも良いのではないですか？結果的に皆無傷でしたし、やむを得ない事情がおりになったでしょうから。」

私が悪気なく微笑みながらそう言つと、

「はあ、そう言ってもらえると助かります。」

と男性が言った。

「結局、おじさんたちのほうが被害が大きかったしね。」

言わなくてもいいことをアリナが言った。

「ええ、貴女とそしてあの少年に完膚無きまでにやられました・・・」

「

男性が私を見ながら言った。いや、あの少年はともかく私はただ砲弾を防いだだけなのです・・・

「ま、まあ終わったことは気にせずにつ」

アリナが慌てたように言った。

「・・・でもあの子強かった・・・」

ユリナが思いだしたように言った。

「確かにそうだねー。あれで私たちと1つしか変わらないっていうんだから・・・」

若干へこんだようにアリナが言う。そこで私は、

「アリナちゃん、ユリナちゃん。人は人、自分は自分です。あの少年は確かに強いですが、貴女たちは気にせず自分の腕を磨いてください。もちろん私もまだまだ修行不足の身ですが。」

とりなすように二人へ言った。

「そうか、そうだね師匠。修行頑張る！」

「・・・私も頑張る・・・」

と、男性が

「あれで修行不足と言われたら・・・」

「戦いが本業でないとはいえ我々は・・・」

二人して頂垂れていた。

「まあねー。でもそれはしょうがないんじゃないかな。師匠の強さは化け物じみてるからね。だからこんなに美人なのに普通の男が怖がって恋人の一人もいないんだよねー。」

と、アリナが言ってくれやがったので私は

「アリナちゃん？あとでお話があるのだけどいいかしら？」

アリナへ微笑みながら言った。

「ヒイツ。ご、ご、ごめんなさい師匠。」

何故かアリナが私の方を見て怯えていた。

「まあ、ユリナちゃんも元気になったことだしそろそろ休憩を終えましょうか？」

「……ハイツ！」「……」

私がそう言つと全員が一斉に返事をした。何故？

立ち上がり、また荒れ果てた道を進もうとしたその時、突風が吹いた。

~~~~~

リシナ達から約1？離れた場所に1人の男が立っており、その男は目を細めながらリシナ達のほうを見ていた。

「大きな音がするんでわざわざここまで様子を見にきてみれば、1、2、……5人か。久しぶりの客だ。精々もてなしてやるとするか。」

~~~~~

そう言つて男はリシナ達のほうへ向けて飛ぶような凄まじい早さで飛んだ。

~~~~~

一瞬巻き起こつた突風でよろけて目を瞑っていた私が目を開けたらいきなり目の前に見知らぬ男が立っていた。

赤い髪の体が大きく屈強そうなその男は私たち全員を見ると、

「ようこそ火喰い島へ、侵入者よ。歓迎するぞ。」

と言った。この口ぶりだとこの住民でしょうね。ただ、そんなことよりも・・・。「ん？どうした侵入者どもよ。珍しいものを見るような顔をして？」

その赤い髪の男はそう言った。それはそうだろう。つい先ほどまで気配すら感じなかったし、その男の額には・・・

「ああ、ひょっとしてこの角が珍しいのか？」

と、男は自らの額にある角らしきものを指してそう言った。

「亜人・・・？」

アリナがそう言うと、

「はっ！人間ってのはどいつもこいつも同じ反応をするな。確かに俺たちは貴様らからすれば亜人と呼ばれる存在だろうよ。いや、何十年前の侵入者は鬼とか呼んでいたっけなあ。」

男は私たちを蔑むように見ながらそう言った。

「何十年前か前？ということとはやはり以前にも誰がこの島、火喰い島と言ったかしら、に来ていたと言うわけね・・・」

私がそう言つと、男は

「ああ、来てたぜ。もっとも、骨すら残っちゃいないがな。」

と言った。

その言葉に全員が警戒し、身構えた。さらに、

「まあ、その時の奴等の目的が亜人を捕まえて売り飛ばすとかいうふざけたものだったからな。何の躊躇いもなく消してやった。どうせ貴様らもそんなところだろう?」

男が言うと、レヴィアスの男性の1人が、

「違うつ！我々の目的は神獣だつ！この島に神獣の居る可能性が高いのでやって来たただけだつ！」

慌てたようにそう言った。すると、

「なんだとつ？成程な。どうやってアレの存在を嗅ぎ付けたかは知らんが尚更生かして帰すわけにはいかなかったな。」

そう言うと、男は両手を前に突き出した。

「アレ?ということは、この島には神獣が居るん」

レヴィアスの男性がそこまで言ったところで、数十m後ろに吹き飛んだ。

「えっ・・・?」

それを見た全員が驚きで固まっている。

「ふん、脆弱だな。」

男がそう言つと、アリナが

「な、何今の？」

と言つた。男は、合点したように

「ああ。そついやそつだな。人間たちの中では廃れたらしいが今の魔法つてやつだ。俺は親切だからな。自分がどういふ風に死ぬのかぐらひは教えといてやるよ」

私たちへ説明した。今、有無を言わず吹っ飛ばしたけど・・・

「魔法？廃れた？その言い方だと人間でも以前は魔法を使つてたみたいね？」

私がそう言つと、

「ああ、そつだ。今もその名残があるじゃないか。人間の村に張つてある結界とかな。」

「結界？あれを魔法というの？昔に妖術師と呼ばれる人たちが使つた術を？」

「呼び方は知らん。だが250年ぐらひ前に来た奴等は確かに強力な魔法を使つていたぞ。」

「250年前？その時に誰か来ていたの？それに貴方はいつた何歳なの？」

「俺はまだ精々300歳ぐらひだが。誰が来ていたかは貴様らのほうがよく知つてゐるんじゃないか？」

「っ！スサノオ。ということは・・・」

「まあ、そんなことはどうでもいい。貴様らは消すだけだからな。」

「待つて、まだ聞きたいことが。」

「お喋りはここまでだ。どうせ貴様らはここで消える。あと、最後に教えてやろう。俺の名はロナン・サタク。火喰い島4柱^{ちゅう}が1人口ナン・サタクだ。この名を頭に刻み込んで・・・死ねっ！」

男が再び両手を前に突き出した。

第14話　風

火喰い島（大陸の者や人間には鬼ヶ島と呼ばれているらしい）は、その全長が数十？ありその道の険しさと合わせて島内を全て歩こうと思えば数日はかかる。並みの人間や動物ならば・・・自分は生まれて物心ついた時からずっとこの島に居り、他の場所がどのような様子なのか知らないということもあるが、広いこの島から出る必要も外との交流も必要もないと考えている。ただ此方がそう思っているても外からは数十年に何回かは侵入者がやってくる主に人間だ。どういう理由でこの島へ来るのか、例えばこの島を自らの領地にしたのか、亜人と呼ばれる我々を捕まえたのかは不明だが友好的な者は1人として居ない。それに外から来る人間はどいつもこいつも皆弱い。唯一の例外を除いてはだが。

そんな今までの経験から、ロナン・サタクは侵入者を見つけたとき、いつもするようにすぐさま排除しようと決めた。暇潰しに多少は話してみたが、やはり侵入者の目的が録なものではないということもあり特に躊躇いもなかった。あいつらには後で結果の報告だけしとけばいいと、島の中央部に居る者たちを思い浮かべて、自らの魔法を放って1人を吹き飛ばした。死んだかどうか分からないがおそらく致命傷だろう。続いて残った奴等へもまとめて同じ魔法を放った。

目の中のロナンと名乗った男が両手を前にかざしたとき、私は無意識に物理障壁を展開していた。見えない攻撃・・・先ほど男

性が飛ばされたことを考えればおそらく物理的な圧力があつたのだとは推察できたので、選択としては間違いないと思う。

ゴオオオー

風が吹くような音が耳に響く。

魔法？と言っていたが、いったい？この障壁にかかる圧力がその魔法というもののなか。するとロナンが私と私の物理障壁を見ながら

「ほう。疾風はやてを防ぐとはな・・・貴様も魔法使いか？」

「疾風はやて？それが魔法の名前ということなの？魔法を使った覚えはないのけれど」

私はその物理的な圧力を障壁で抑えながらそう言った。が、

「そうだ。だがっ！」

と言うとロナンの両腕がさらに力を入れたのか膨れ上がり圧力が明らかに強くなった。

「くっ、押しきられるっ！」

すると横からユリナが、

「・・・手伝う」

と、同じ物理障壁を展開させ此方の方が優勢になる。

「もう1人だどっ？ばかな？貴様らは何者だ？」

ロナンが驚いて言う。

「何者と言われてもね。ただ退魔術を使う退魔師っただけよ」

今度はアリナがそう言いながら弓を構えた。

「退魔師だと？聞いたこともないぞそんな奴等は。だが俺の魔法を防いでいるのは紛れもない事実。魔法の一種では、グハア！」

「へへ。どう？退魔術式弓術の威力は」

アリナの障壁の此方側から放った矢がロナンの右太もも当たりに突き刺さっている。けど・・・

実際、退魔術式弓術の破壊力は岩も砕くぐらいある。それは、プラーナと呼ばれる大気中の精気を弓矢に取り入れ弓矢自体の強化、矢の速度を上げるのに利用される。アリナは未だ結界を張ったり障壁を展開させることは出来ないがその代わり武器等の身の回りの物にプラーナを纏わせたり格闘の際に自らの身体の強化をすることができる。それにしても2人分の結界を貫いた上にさらにあの風の中を通すなんて、そんなに威力があったのかしら。

「さ、3人だと。き、貴様ら全員魔法使いかつ！全員？侵入者は五匹居たはずだっ！」

先ほどまでの余裕が消えたロナンが焦って周りを見回すと、

パン

音がした。

「グアアッ！」

ロナンが急に右腕を押さえて痛がりだした。

見るといつの間にかレヴィアスの男性がロナンの右側5mぐらいのところにたっており銃を構えていた。

「グッ。何だこれは。貴様がやったのか？今何をした？」

ロナンが腕を押さえて男性のほうを睨みながらそう言った。
男性は、

「どうやら亜人とはいえ銃は通じるようだな。今度は決めさせてもらうつ！」

そう言つて再度引き金を引いた。だが・・・

「ハアッ！」

銃弾はロナンの手前で一瞬止まり地面に落ちた。

「なっ！くそっ！」

それを見て焦った男性は再度引き金を引いたがまたしてもロナンに当たらず地面に落ちた。

「俺に鎧風がいふうを使わせるとはな・・・だがここまでっ？グアッ!？」

再度、アリナが矢を放ちロナンの左肩辺りを掠めた。

「あれ？外したっ？」

アリナがそう言つとロナンが、

「鎧風を貫くだどっ？ いったい何なんだ貴様らっ！？」

何故か怯えたように私たちのほうを見た。

「だから、あのオジサンはともかく私たちは退魔師って言ってるじゃない」

アリナが若干呆れたように言う。

「くっ。退魔師かなんだか知らんが此方の分が悪い。追い風っ！」

と、ロナンが叫ぶと、どこからともなく突風が吹いた。一瞬目が開けられず、

アリナが

「きゃっ！あ、あれ？」

と言ったので、目を開けてみると、そこには

「あいつは何処に？」

男性が言うようにロナンの姿がどこにも無かった。

成る程。私は合点したように、男性へ

「おそろくですが、私たちに倒されそうになったため魔法とやらを使っこの場所から逃げたのでしょうか。」

「ということは我々はあの亜人を退けたのですねっ！」

助かったと言いながら男性は安堵していた。そして

「そうだっ！あいつを」

と言いながら飛ばされた男性のほうへ駆け寄っていった。私はそれを見ながら、

「大丈夫かしら？」

と呟き、

「師匠が居るから何とかなるでしょ」

「・・・師匠が居るから大丈夫」

アリナとユリナがそんなことを言った。まあ確かに退魔術には怪我をしたときの為に治癒をする技もあるのだからそのとおりなんだけど・・・それにしても、

「アリナちゃん？」

「ん？何、師匠？」

「貴女はいつあんなに腕を上げたの？矢で障壁を突破する破壊力なんて以前はなかったでしょう？」

「うーん、私もまさかあれほど威力があるとは思ってなかったんだよね。ただ、矢にプラーナを溜めるとき何時もより遥かに精気が集まっていくなのは感じたよ？」

「そう。何となく分かったような気がするわ。」

そう言われてみれば私もユリナちゃんも何時もより大分障壁の展開

が早かった。だとすればおそらく、

「えっ？どういうこと？」

「多分だけだね。この島には大陸よりも遥かに濃いプラーナが大気に漂っているの。だから私たちみたいなプラーナを利用する退魔師は何時もより強大な力を発揮できるというわけ」

そう言うと、2人は納得したような顔をしていた。

と、もう1人の様子を見に行った男性が、

「大丈夫ですっ！こいつは所々怪我をしていますが気絶しているだけですっ！」

向こうのほうから此方へ大声で叫んだ。

「よかった。じゃあ行きましょうか。」

私は2人へ促すと男性が居るほうへ歩いていった。

~~~~~「くそっ！人間風情がっ！」

ロナンは風の魔法を使って飛んで移動しながら悪態をついていた、時速約200kmぐらいで。

今まで侵入者、それも人間にここまでの手傷を負わされたことなどなかったから急いであの場所から離れた。だが・・・

「いつたい退魔師とはなんだっ？何故人間が魔法じみたものを使える？」

自問しても、知らないことが分かるはずもない。そもそも脆弱で戦う術もないものが人間だ。我々のように亜人と蔑まれながらも、人間ではもちえない能力もないのに、あそこまで強いのが信じられない。

「どちらにせよ一度戻って報告する必要があるな・・・」

そう考えるとロナンは憂鬱になった。傷を治す必要もあり侵入者の目的も話さねばなるまいが・・・この傷を見てあいつらは小言を言うだろうな。独断で行動するとか油断したバカ者とか。ただ、あいつらは間違いなく強い。下手をすればあいつよりも・・・今もおそらく自分のように島の何処かに独断で彷徨っている仲間の顔を思い浮かべ、首を振った。まさかな、あいつは我々の種族の中でも飛び抜けて魔力が高い。それはないか。

そこまで考えたところで島の中央部が見えてきた。

~~~~~

その男は魔力を感じる能力を持っていた。だから自分の仲間の1人が自分の居るここから島の反対側辺りで、おそらく侵入者であろう者たちと交戦していたのは分かっていった。だが、

「・・・おかしいな。ロナンのやつは何故帰ったんだ？」

思わず呟いていた。何故なら侵入者らしき3つの魔力がそのままその場所に残っているのに、好戦的な仲間であるロナンがそれを残して帰るなど何時もなら考えられないからだ。

「逃げ帰ったか？」

多分それしか考えられない。そんなにあの侵入者は強いのか。それに・・・

「もう1つのほうも気になるな」

先ほどロナンが居たのとは別の場所で一瞬だが凄まじい魔力を感じた気がしたのだが。まあ、あの辺りは守護者の範囲内なので、仮に侵入者が居ても守護者に排除されたとは思うが・・・
男はそこまで考えると、前方に気配を感じた。

くくく

「レンジさん。漸くそれっぽいものがありましたよっ！」

リクオが前方を見て、弾んだような声を出したので見てみると、そこには木で出来た巨大な門があった。

「ほお。でかいな。」

「いや、感想がそれだけですか？レンジさん。あれは明らかに建造物ですよ。つまりこの島には何者かが確実に居るということでしょうっ！」

リクオがやたら興奮していた。まあ、島の入り口から四時間ぐらい歩きっぱなしだったからな。何もなさすぎて心がおれそうだったんだろう。分らないではないが、

「まあ、落ち着けリクオ。まだ住民が見つかったわけでもないだろう、なあ？」

おれは後ろについて来ているレヴィアスの3人へ言った。だが、

「おお」

「これは・・・」

「やはり神獣はこの島に・・・」

3人はリクオと同じように前方の門を見てそれぞれ感嘆の声を漏らしていた。

俺は苦笑して、

「お前らなあ。仮にも探索団だろ？こういうのは大して珍しくもないのじゃないか？」

と言うと、1人が

「そうは言いますがレンジ殿。我々はどういった未知なるものを発見するという行為のためにこの仕事をしているのですよ。それに、門があるということはこの先にこの島の住民の集落がある筈です。ここまでくれば一気に神獣に近づいたと言っても過言ではありませんん。」

リクオと同じく興奮した様子で言った。

ちなみに俺たちは歩きながら話しているので先ほどは遠くに見えた門まであと数mというところまできていた。

「まあ、そうだけだな。でも結局神獣が見つからなければ、それもその時その巨大な門の陰から1人の男がのそりと出てきた。そして、

「ようこそ、侵入者の諸君」

と言った。その姿を見て

「な、何者だっ！」

とリクオが言う。若干怯えたような声なのはその男の姿によるものだろう。なにせその男は・・・

「ほう。中々度胸があるな、人間よ。以前見た侵入者は私の姿を見ただけで怯えて声もだせなかったがな」

見た目は、顔こそ赤茶けた髪を立てた火の大陸の者とそこまで違わない造詣だが、体は二mを超える大男で体は筋骨隆々なのに妙に落ち着いた口調で話しかけてくる。・・・何よりその額からは二本の角が生えている。その姿はまるで伝承にある、

「お、鬼かつ!？」

再度リクオがそう言う

「ふふつ。面白いものだ。侵入者はいつも私の姿を見てそう言う。それが亜人とな」

その男が微笑みながらそう言った。

「違うのか？」

俺がそう言う

「まあ、間違っではない。我等は鬼族きぞくと名乗っている。呼び方は好きにすればいい。今後の付き合いをどうするかは今からの展開次第だな。」

「今からの展開次第？　どうということだ？」

「簡単だ。諸君らのこの島に来た目的次第ということだよ。もし、我々と友好を結びに来た、というなら歓迎しよう。だがそうでなかった場合・・・」

「なんだ？」

言い淀んだので俺が聞くと、

「ここで全員死んでもらうことになるな」

と言つて此方を鋭い目で睨んできた。

その瞬間リクオをはじめ他の3人も驚愕で固まった。おれは、

「死んでもらう、とは穏やかじゃないな」

「まあ、気にすることはない。例えば今までこの島にやって来た侵入者の目的は大抵我等を捕まえるだとか、この島を自らの陣地にしようとか、おろかにも自分の弱さを理解していないようなものばかりだったからな。諸君もそうならば、という話だ」

穏やかな口調で話しながらも此方を睨みプレッシャーをかけてくる。

「いや、俺達の目的は神獣探しだ。そういったことじゃない」

と、俺が言つと男は僅かに目を見開き、

「神獣とはな・・・やはり人間の中にも魔力を感じ取れる者が居る

ようだな。だが、何故神獣を求める？あれは我等にとっては必要だが諸君ら人間にとって不必要なチカラだと思うが」

この男の口ぶりだと神獣が居るのは間違いないな。

「ああ確かに。俺は、というより火の大陸には別に必要ないな。ただの調査だ。だが、」

と後ろの3人を見ながら、

「この水の大陸の奴等にはどうしても必要らしい。というのも・・・」

「

俺は目の前にいる男に、ガルディアから聞いた水の大陸の状況を聞かせてやった。さすがに驚いたようで、

「一晩で国が消滅しただと。そんなことが・・・もしや・・・」

「心当たりがあるのか？」

「あ、ああ。さすがにそんな真似ができる存在は限られている。だが目的が分かん。」

「知っているやつなのか？」

「知っていると言えば知っている。我々からすれば雲の上の存在だ。太古の昔から存在しているお方だ」

「太古の昔？御伽話みたいだな。」

「そうだな。私は精々500年ぐらいしか生きていないがそのお方は少なくとも数万年前から存在しているはずだ。」

「何者だ。そいつは？」

「我等鬼族を創造した、とされているお方だ。」

「創造？それはまるで神様みたいだな・・・」

「ある意味では間違っではない。そのお方は魔神と呼ばれている」

「魔神？」

「そうだ、そして創造主であると同時に我等の始祖だとも言われている」

「つまり、あんたら鬼族の産みの親でしかもご先祖ってことか・・・」

「ああ。だが伝え聞いた話に因ればあのお方は此処より遙か彼方の大陸に居られるはずだ。それにわざわざ国を潰す目的が」

目の前の男がそこまで言ったとき、生暖かい風が吹き周りが見えなくなっただ。

そして、

「何のお話してたのかしら？私にも聞かせて頂戴」

声のしたほうを見てみると銀色の杖を持ち、黒いローブを着た小柄な少女が立っていた。

第14話 風（後書き）

ご意見感想等あればお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1121y/>

剣盗りモノガタリ

2011年11月24日22時47分発行